

山びこ通信

11月号 2009.11.9

「クラス紹介」

「教えることは学ぶことである」

文・山下太郎

Dum docent discunt. (人は教える間、学んでいる) というラテン語があります。英語では、To teach is to learn. (教えることは学ぶこと) と言われます。子どもたちに、あるいは学生に教える仕事を少しでもすれば、誰もがこの言葉に共感できると思います。

自分は教えるのではなく学ぶ立場だと思っている人は、友人関係の中でこの言葉の意味を考えてみてもよいでしょう。

友だちに何かを教えて喜ばれると嬉しいものです。少しでも丁寧に説明しようとして、無意識のうちに真剣に言葉を選びます。その結果、相手にとってはもちろん、自分にとっても新しい言葉の発見が得られたり、逆に知識の不足に気づいたり・・・。いずれにしても、自分にとっての「学び」につながります。

一方、子を持つ親にとっても、表題の言葉は意味を持ちます。子どもの教育を通じて親も成長すると言われますし、事実そうだと思います。子育てを通し、親は人間としての己を見つめ、自分が大切に思う価値を再評価する機会を得ます。

「教える」という言葉を使うとどうしても学校の教育を連想しますが、今述べたように、自分が大事だと思うことを他人に「伝える」という意味でとらえるなら、日常の至るところで「教え、学ぶ」関係は見られます。

これは、いわばアウトプットとインプットの関係です。息をしっかりと吐ききるとしっかりと吸い込むことができるように、蓄えた知識や知見を外に出しアウトプットすればするほど、逆に学ぶ力、すなわちインプットの力も大きくなります。

学んだことを他者に伝える方法にはいろいろありますが、私は「話すこと」だけでなく、「書くこと」に注目したいと思います。「話すこと」の意義は言うまでもないのですが、自分を高めてくれるよい話し相手がいつも見つかるとは限りません。それに対し、「書くこと」は、自分自身がいつでも「読み手」になれるという利点を持ちます。

例えば、授業であれ、読書であれ、他者から学んだ内容を自分の言葉で要約し、意見や感想をそこに書き加えます。この言葉の記録は、日を置いて読み返すことができます。つまり、文字を仲立ちとして「書き手」の自分は「読み手」の自分を「教えること」が可能となります。言うなれば、「教え、学ぶ」関係が自分の中で実現するわけです。

文章を何度も練り直すことを「推敲」と言いますが、人は真面目な表現者であるかぎり、よりよい表現を求め、四苦八苦するものです。言い換えれば、「書き手」の自分は「読み手」の自分の美意識を満足させようと懸命になることができます。同様に、人は真摯な「学び手」であるかぎり、「教え手」としての自分に無数の問いを發します。知的好奇心が健全に輝く人ほど、曖昧な答えに納得したり、簡単にわかったふりをすることはありません。

では、このような独学のスタイルが理想的な学びを保証するのでしょうか。私はそうは思いません。今述べたのは、学びの下地としては立派ですが、独善に陥る危険と紙一重です。『論語』の冒頭には「朋遠方より来る有り、また楽しからずや」とあります。私は、向学心のある「学び手」同士が集い、互いに「教え、学び」あえるなら、それに勝る環境はないと考えます。実際そのような場では、先生も生徒も、出会った者同士が互いに切磋琢磨し、高みを目指して努力することができるでしょう。

「山の学校はそういう場所でありたいと願って6年前にスタートしました。今、この理念は若い世代の講師陣にしっかりと受け継がれ、どのクラスについても充実した取り組みが展開しています。本通信の「クラス便り」にてその一端をご覧頂ければ幸いに存じます。

(山の学校代表 山下太郎)

勉強会の取り組みについて

山の学校の近況報告をいたします。8月末に小学生を対象とした第一回「勉強会」を開きました。この会の趣旨については、保護者宛に次のようにご案内しました。

「勉強会」立ち上げの趣旨

「学校の勉強でわからなかったことが、お兄姉ちゃんに説明してもらってよくわかった」と言ってもらえたら、だれだってうれしいです。そうして教えてもらった喜びは、必ず年下の誰かに伝えたいというのが人間の本能だと思います。「山の学校」はそのチャンスを提供したいと思います。

将来「なぜ勉強するのか？」という疑問が芽生えたとき、「勉強は自分のためだけにするものではない」（社会的な意義のあることだ）と胸を張って答えてもらいたいと思っています。（自分のためだけに学ぶ人は、どこかで「なぜ学ぶのか？」と悩むのではないのでしょうか）。

今回企画した「自学自習の場」では、先生は個々の質問に対応する「相談員」ではありません。子どもたちは、原則として年上の生徒にわからないことを教えてもらい、逆に、わからないことを年下に教える。これが参加者のルールです。

教え好きの生徒はどこまでも他人の世話をするでしょう。そしてじつは大切な何かを学び、身につけていきます。要領のよい子は、上手に他人からわからないことをたっぷり教えてもらって家に帰るでしょう。どちらがよい、という問題ではなく、そのような「自学自習」の経験を積むことが子ども時代には大切であると考えます。

生徒同士でちががあかないときにはどうするか？先輩（最終的には先生）の出番です。答えを上手に教えてもよし、上手にヒントを教えてもよし。そこは山の学校の先生です。うまくその場の経験が子どもたちの心に残る学びの機会になるよう持って行ってくださることでしょう。

「勉強会」に参加する子どもたちには、「教えることは学ぶことである」という事実を肌で感じると思っています。教えるということは、たいへん難しいことです。単に答えを伝えたらよいというのなら、解答集を見せればよいからです。なぜこうなるのか？年下の子どもでもわかるように教えるには相応の苦勞がつきまといまいます。そこが狙い目です。そこに自省のチャンスが生まれ、クリエイティブな何かが養われます。

この勉強会が、将来どのような形に発展するかどうかは未知数ですが、9月以降も様々な「自学自習の場」を企画し、実践していきたいと考えています。

この会には浅野先生と小林先生にご参加いただきました。事前の打ち合わせでは、集中力が持つかな？とか、課題が終わって中だるみする子がいたらどうするか？など心配もありましたが、結果はこちらの予想を見事に裏切るものでした。

全体を振り返ると、二時間ノンストップでよく勉強を続けることができたな、と子どもたちのがんばりを称えたいと思います。会の趣旨をご家庭でしっかりお話くださったおかげだと思いますが、どのお子さんも下の学年の子に質問されたとき、本当に親身に「指導」してくれました。言葉遣いが俄然優しく丁寧になるのがほほえましかったです。

また、一人の子が困っていると、二人がかりで教えてあげようとする光景もあり、教えてもらった子は単に答えの導き方だけでなく「何か心に残るもの」を感じたに違いありません。

一方、中学、高校生を対象とした同じ趣旨の取り組みも同時期に実施しました。参加者は僅かでしたが、それはそれで大変実りある取り組みとなりました。特筆したいことは、この会をきっかけとし、浅野先生の発案で毎週水曜日の夜の時間枠に「自習会」が立ち上がったことです。先生のメッセージをご紹介します。

「毎週水曜日（9月23日の秋分の日を含む）の18時45分から21時30分の時間帯に、みなさまの自習時間として山の学校を開放いたします。もちろん参加は無料で、途中入退場も自由です。家では勉強しづらいという方は是非この機会をご活用ください。私、浅野が待機しており、英語や数学などある程度の質問にお答えすることはできるかと思いますが、基本的には自学自習の場を提供するだけです。いわゆる「指導」は期待せずに、自分で自分のやるべきことに取り組んでください。それが学科科目の勉強であっても、本を読むこと等であっても構いません。お互いに教え合うことも歓迎しますし、いつの日かここで学んだことを活かしてくれることを期待しております」。

このように中学、高校生に関しては、今まさに「自習」の場を共有する展開が始まったばかりですが、いずれは参加者も増え、「読書会」のような取り組みも活発に展開するようになればと期待しています。

（山の学校代表 山下太郎）

◎冬学期の時間割◎

	4:20-5:20	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
月			かず6年	ラテン語入門
火	しぜんA・B(隔週) かがA(隔週) かず1年A	ことば1年A ことば5年 かず3年A	ギリシア語入門	ラテン語初級講読A ギリシア語講読
水	ことば2年	かず2年 かず3年B かず4年	中1英語の基本 古文講読	ラテン語初級講読B 高1英語の基本
木	しぜんC・D(隔週) かがB(隔週) ことば4・5年	かず5年 ウェブプログラミング入門	高2英語の基本 高1・3英語の基本 英語指導(一般)	高校・数の基本
金	ことば1年B ことば3年 ことば3~5年	かず1年B かず3・4年 かず5・6年	ことば6年	ラテン語初級講読C ラテン語中級講読

第3回 小学生・勉強会

とき 1月30日(土)

午前9:00~11:00(参加無料)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

対象 山の学校会員の小学生

持物 自習用の問題集・筆記用具

第3回 ひねもす道場

とき 11月30日(月)

午後4:00~5:00(参加無料)

場所 山の教室

内容 『最長・最強のマジックハンドを作ろう』

対象 山の学校会員の小学3年生以上

第17回 ラテン語のゆうべ

とき 11月16日(月)

午後6:30~8:00(参加無料)

講師 前川裕(山の学校ラテン語講師)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

演題 『バルセロナのラテン(語)文化』

対象 ラテン語に関心のある方

しぜんA (火曜クラス)

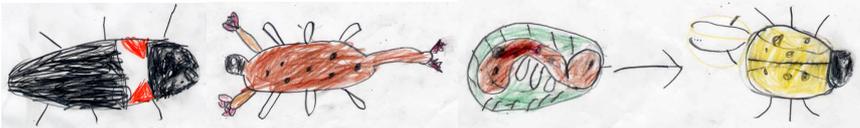
——探検家たち 蝉の合唱、汗ばむような陽気に包まれ秋学期がスタートしました。ひんやりとした青空が秋の到来を告げています。夏休みがその力を蓄えたのでしょうか。5人の仲間達は溢れんばかりの活気に満ちています。「確か森の中に涼しくて気持ちよさそうな場所があった」とU隊長。瞬時にみんなの心が一つとなります。



一列になって森の中を駆けてゆく5人。「なんかおった！」時々何かを見つけては声に出しています。駆けながらもその目はしっかり何かをキャッチしている様です。彼らの背中を追い、列が広がり過ぎぬよう注意を呼びかけながら「これでいいのだ…」と胸に呟いたのを覚えています。彼らの足取りは、あるがままの本能に根差していました。それに、私が先導しては探検になりません。「みんなが駆けると大地が揺れる！」傍にいたH君が駆けながら呟きます。秘密の広場に辿着きドングリ拾いをした後、木々に囲まれながら急斜面を滑るように沢へ下りてきました。「ここだけ明るい!」「ここに立つと何か気持ちいい!」小川に沿って上下しながら各々が自発的に「気持ちの良い場所」を見つけ、教え合います。「ずっとこうしていたい…」U君が名残惜しそうにいつまでも小川に手を浸しているのが印象的でした。

——しぜん日記 各自のペースで自由に書き、発表する「しぜん日記」。誰かの発見が、皆の発見となります。ここに、その一部をご紹介します。全て掲載出来ないのが残念な程、豊かな個性たちです。(詳細はウェブログをご覧ください)

● 簡潔な文章と迫力の絵で、出会いの感動を伝えるT.Y君の日記。



左) 八瀬で見つけた螢。触ったあとはすぐに逃がしました。中央) 近くの田んぼで見つけたざりがに。その手触りや重量感を、感覚的に、的確に捉えています。右) 友達と公園で見つけたてんとうむし「うまれたてだしかわいかったです。」

● 感じ、考え、調べた事を盛り込みドラマチックに伝えるA.Y君の日記。



左) 「…ものすごくたくさん数えきれないからすです。こわくておねえちゃんとキャーといました。…からすはびわが、すきだそうです。『えさがあるよ』と仲間をあつめているのだと思いました。びわのみがなくなると、からすはこなくなりました。」

右) 「…フェリーみたいな大きなくもがうかんでいました。え本でみると『ねぐも』という、そうせきうんの種類のようなです。…きせつによってくもの種類はかわるときぎきました。」

● クラスで描いたH君のユーモラスな絵画作品。



左) 「わさわさ」外で描いたハルジオンの種子。

右) 「もし〇〇になれたら××をしたい」という題で描いてもらった絵。高い木の葉を食べるキリンの嬉しそうな表情が印象的でした。

お兄さんのU君は高学年で忙しい為でしょう、今年度はまだ日記がありませんが、かがいクラスで表現力を存分に発揮してくれます。又、頼れるお兄さんとしてクラスを引っ張ってくれています。

● 生き物をよく観察し、詳しく伝えるF.Y君の日記。

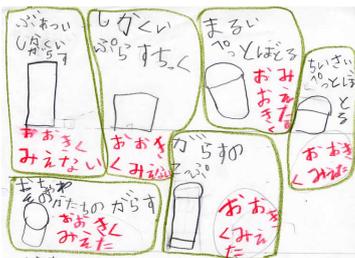


左) このヤモリの記録には、目が乾くと舌でなめる様子や、開いた口の中の様子や、上顎・下顎・咽の奥に分けて克明に図解されています。しっぽまで測ると小さいので8.5cm、大きいので11.5cmくらいありました。

右) 「僕が飼っているコクワガタは4cm位です。目は黒く光っています。」

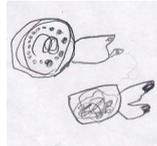
しぜんC (木曜クラス)

——「なんでだろう」が作るクラス 1年生の5人組。各々が「しぜん日記」で伝えてくれる発見や疑問、捕まえてきた虫、拾ってきたもの等を種として、色々な自然の話題についてゆっくり話し合う時間が増えてきました。又、皆からの疑問をプリントにまとめ、クイズや穴埋めをしながら一緒に考える事も始めました。それでも追いつかない程に溢れる「なんでだろう」によって、クラスは「しぜん」に作られてゆきます。その着眼点や表現は実に多様です。



「四角い容器は大きく見えない。丸い容器は大きく見える。」水を入れた様々な容器にスプーンを入れるY君の実験。最近では「赤ちゃんはなぜお乳をのむのか」等、弟さんを持った事から発せられる疑問が多く、皆にも考えてもらいました。こんな詩もあります。「Yがくしゃみをする、Rちゃん(弟)もくしゃみをする」

「蝸牛は顔をを出していない時は眠っていると思います。S君は考えた事をはっきりと伝えます。「こうもりは何故逆さなのか」については「敵に襲われないため」と考えました。Y君が「コウモリが羽で隠しながら赤ちゃんにお乳をあげていた」のを見た事を教えてくれました。



な所にいるんやろ？」とT君。「人間が神様から生まれたなら、神様は誰から生まれたのか?」彼は「動物や人間、地球がいつどのように生まれたかに興味を持っています。Sちゃんは、地球が出来た理由について「たまたまとんできた星が魔法の星で、地球の砂で、その砂が固まったから。」と綴った後、段落を変えて「宇宙の塵やガスが集まって誕生した。46億年前。21世紀子供百科で調べた」と続けています。どちらの段落からも、真実味と喜びとが伝わってきます。(左:松ぼっくりの手作り)



「この種は何の種ですか?」白粉花の種を日記に貼ってくれたKちゃん。「亀はなぜゆっくり歩くのか/オクラはなぜ星形なのか」等、疑問が一杯です。「テントウムシになぜ点々があるか」という疑問から、「テン」は「点」なのかという疑問が新たに生まれ、皆で考えます。「天道虫は巨大な天体を司る神様かもしれませんね。」私がそう言うと「神様は色んな所にいるんやろ?」とT君。「人間が神様から生まれたなら、神様は誰から生まれたのか?」彼は「動物や人間、地球がいつどのように生まれたかに興味を持っています。Sちゃんは、地球が出来た理由について「たまたまとんできた星が魔法の星で、地球の砂で、その砂が固まったから。」と綴った後、段落を変えて「宇宙の塵やガスが集まって誕生した。46億年前。21世紀子供百科で調べた」と続けています。どちらの段落からも、真実味と喜びとが伝わってきます。(左:松ぼっくりの手作り)

秋学期では、自然のものを使った工作と、A・Cクラスと合同で、栗ひろいをして食べることに、チューリップの球根植えをしました。栗とチューリップの取り組みについては、次項をご覧ください。ここでは、「自然の工作」の取り組みについて、ご紹介します。

ドングリや落ち葉など、自然のものを使って工作をしてみようと思いついたのは、春学期の終りあたりに、DクラスのKちゃんが「生け花してみたい！」と言ってくれたのがきっかけでした。「生け花」のみとなると、素材や方法が限定されてしまうような印象があったので、しぜんクラス全体としては、その「生け花」も含めたより大きな括りとして、「自然の工作」に取り組んでみようということになったのです。

まずは工作の材料を、森の中から見つけます。ふだんは何気なく通り過ぎてしまうような場所も、目を凝らせば宝の山です。みんな、いつもよりゆっくりと森の小径を歩いて、感性のアンテナを張りめぐらしていました。

次の回に、栗とチューリップの合同の取り組みを挟んだので、この文章を書いている時点では、Dクラスはまだ実際の工作に移っていませんが、Bクラスでは、この合同の取り組みの前に、一度工作の時間をとることができました。みんなそれぞれ独創的な作品を作ってくれました。このことも含めて、各クラスの具体的な様子を、写真でご紹介していきます。

しぜんB（火曜クラス）



クヌギの実のカサを発見！



葉のついたドングリもあるよ



自然のシーソーであそぼう



こっちは自然のすべり台！



さあ、なにを作ろうかな？



ここをこう切って…



葉っぱの絵の完成だ！



ガオーッ！ ライオンだぞ！

しぜんD（木曜クラス）



え！？ なに見つけたの？



抜けがらをつけてみました



ほら、ここにもあった！



あの実、とってあげる！



さあ、今日も探すぞ！



すごくきれいな石を発見！



笹舟つくって流しましょう

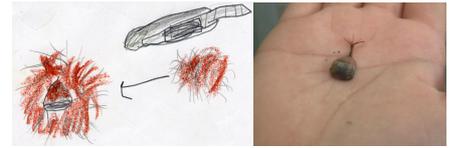


もっと奥にはまだあるはず

(文責：高木 彬)

■ 秋の収穫祭「お山の栗を食べてみよう！」

校舎の南側に落ち始めた茶色いイガグリ。9月半ばに割って中を調べると、しわくちゃな実や豆粒程の実ばかり。「こんなに落ちているのに、実は生らないのかなあ…」ところが連休が明け、落ちているのは青々とした大きなイガグリに変化していました。繰り返した秋雨と陽光が一気に実を太らせたようです。秋学期3回目のクラス。この収穫時期を逃すわけにはいきません。



F.Y 君作

まずは栗拾い。足で毬（いが）を外します。小さな手で器用に中の実だけを抜き取る子、いがごと勇ましく何度も踏んづける子、拾い方にも個性が出ます。各自手に持った袋は栗でパンパンに。洗って鍋に移し、強火で30分。茹上ったら、鬼皮ごと2つに切り、スプーンですくって食べます。今度は同じくお山で採れたドクダミ茶を沸かします。ドクダミ茶は子供たちには飲みにくい味かと思えば、意外にも好評で、美味しいといって何杯もおかわりする子もいました。

● C・Dクラスの様子 (10 /1)



包丁にもチャレンジ。



ドクダミ茶も作りましょう



こんなに実がつまってる！



うまーい！！



だんだんコツをつかんできた



「ここに座って食べよう」



S君が丸太に腰掛けていて…



仲間が集まりました「おいしい！」

「何だか今日は遊んでいるみたい！」誰かが呟きます。ほんのりと甘い学びの日を、いつか思い出してくれるでしょう。

● A・Bクラスの様子 (10/6) 雨天のため、栗拾いの後は、かいが室に集まります。



見て！こんなにひろったよ！



大きな鍋が一杯になるほどの栗。



待ってる間に日記を発表。真剣にききます。発表者には皆で拍手！



部屋が甘い香りに包まれます。



山盛りだ！



切っても切ってもおかわりの列



包丁ならまかせてよ



うん、おいしい！



ドクダミ茶葉は、春学期からAクラスで採取し乾燥させていたものです。



最後は余った栗も、鍋に余ったお茶も、袋に入れてお土産に。きれいになりました。

■ 「チューリップを植えよう！」

ある日は、クラス合同で、来年の春に向けて、花壇にチューリップの球根を植えました。新入園のお友達をお迎えるための、お兄さん、お姉さんによる、栄えある大切な役割です。

まず教室で、チューリップの球根やその種類について簡単に説明しました。見慣れた形のものもあれば、二色が混ざったもの、枝分かれするものなど、種類は意外と豊富です。

また、植えるための手順を説明しました。花壇に生えている雑草を抜き、スコップや手で土を掘って耕し、新しい土を加えてよく混ぜ、よく映えるような球根の並びを考え、そして球根を植え、土を均して、お水をやり、最後に周囲のお掃除をして、猫よけのネットを被せたら、あとは来年に芽が出るのを、花壇のお世話をしながら見守ります。

さあ、いよいよお外に出て、作業開始！

● C・Dクラスの様子 (10/15)



生きているのかな？
土から古い球根が出てきました。

咲いてたお花はそっと引越し

大きなシャベルは順番こ

球根の種類がこんなに沢山！



まずは並べて

次々に植えていきます

植えたら土を綺麗にならそう

早く大きくなってね！

● A・Bクラスの様子 (10/20)



どんどん耕そう！

スコップ二刀流！

ここは僕にまかせて！

プランターにも土を敷こう

カラタチの枝には気をつけなきゃ

どう並べればきれいかな？

お水をたくさんあげましょう

(文責 梁川 健哲、高木 彬)

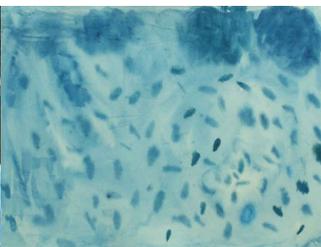
開講初年度となる「かいが」クラスも、気付けば一年の半分を過ぎようとしています。春に出会ってから、心の中に抱いてきたクラスの皆さんの肖像が、回を重ねる毎に確実に、それぞれの個性で鮮やかに彩られ、色合いを深めてゆくように感じられます。それは、ただ一定の時間を共有してきたからではなく、やはり「描く」という行為の全体——皆さんが絵画と向き合う様子や、描かれた作品を通してのものだったと実感しています。

クラスではそうした皆さんの取組み姿勢、気質や志向性のようなものを汲み取りつつ、課題に柔らかさを持たせてゆく方針ですが、秋学期は最初に、全体の予定を皆さんにお伝えする事にしました。課題にスッと入り込めるよう、心の準備をしてもらうためです。ここでは第2・3回に実施した取組みを中心にお伝えします。

■「空を描く」

この課題には、いくつかのねらいがあります。一つは絵の具のしくみを現象として体験してもらうことです。空の色は溶け合いながら移ろい、雲は生まれては消え、形を変えてゆきます。これらは、絵を描く過程で紙の上で起こっている出来事とまるで違いありません。空は絶えず絵画する、偉大な先生です。また、色を重ねる事で生まれる独特の奥行きが「空気感」と喩えられるように、(透明)水彩らしさを楽しめる画題です。もう一つのねらいは、細かな形にとらわれず「思い切って描く」こと。恐れる事なく自由な実験を試みる事です。2回を設けた空の課題。外へ出て、空をじっくりと眺めてもらい、描く場所を選んでもらう所から始まります。紙は「水彩紙」を用い、2回目からは「透明」水彩絵の具に初めて挑みます。さて、どのような発見が待っているのでしょうか。

● かいがA(火曜クラス)の1回目(9/29)は雨天のため、室内にて「心に思い描く空」を描いてもらいました。



雨空を描くJちゃん。
滲みの加減で、雨粒が遠くに近くに見え、奥行き感が出ています。自由なタッチの方向と下塗りの筆跡が不思議な流動感を与え、雨粒が激しく渦を巻くようにも、軽やかに舞うようにも見えます。



I.Nちゃんは、今日の雨空を吹き飛ばすような太陽。空の中に、一艘のヨットが浮かぶのにお気づきでしょうか。最後に「できた!」と言って斜めに持ち上げた紙の上を、じわっと絵の具が流れました。水彩ならではの面白さです。



Hちゃんは画面下端から左右に刷毛を動かし、青がスッと消えていくようなぼかしを作り、更に赤を塗り広げていきます。最後に描き入れた黄金色の太陽がじんわりと滲みました。幻想的な風景。



Mちゃんは雨模様。最後まで一心に絵の具を動かし続けていました。濃い白が面白い効果を生み出しています。I.Nちゃん同様、紙全体に水を引いてから描きました。これらは教えられたのではなく、ヒントを元に各自が考えた方法です。



H君は、画面下端から刷毛を使って丹念に淡い色を重ねてゆきます。全体を染める赤と、刷毛跡の感じ、弧を描いて絶妙に滲む真っ赤な太陽が、柔らかく、暖かな雰囲気を作り上げています。



「お天気雨を描いてもいい?」N.Nちゃんが目を光らせて聞きます。ある日見た光景を、鮮明に覚えているようです。画面に置いた水滴に、絵の具をつけた筆先で触れて色を注入する技法を編み出していました。

2回目(10/13)は幸いの晴天。園舎の並ぶ、西側の石段に腰掛けた3人が、夕焼け空と向き合います。



「山とか家とかも描きたい!」と言うI.NちゃんとMちゃん。パレットに沢山の色数を絞り出す所から始めます。果たして賑やかな絵が出来上がり、最後は楽しさ余ってか、手形を入れて完成です。I.Nちゃんは、空の広がりを緩やかな弧で表現しています。黄金色にたなびく雲が印象的です。(左上)。Mちゃんは、遠く霞む山裾を「削用筆」でぼかしており、眼下の家並みとの距離感を生み出しています。空の中に溶け込ませるよう横向きに置いた手形が、大気の流れを感じさせるようです。(左下)N.Nちゃんは赤と橙を使い分けて滲ませ、広がる夕日の光を表現したようです。ガーゼで押さえて色加減を調節していました。園長室や、脇にある花壇、石段に腰掛ける自分自身も描き込みました。(上)

かいがB（木曜クラス）の1回目（9/24）。各自が園庭の中で気に入った場所を選んでくれました。



K君は、空を振り返っては画面に向き直り、立ったりしゃがんだりしながら全身で描きます。描かれた雲にも躍動感が感じられます。（左）

この日、最も空に近いM君。ジャングルジムの上で描きます。空の中にも赤っぽい色がある事を発見。爽やかな青と、太陽の黄色との対比が効いています。（右）



気負いなく描けるよう、用紙は四切に加え、八切も用意。各自が選択しました。

IちゃんとCちゃんはブランコで肩を並べて描きます。西に傾いた夕日を正面から見られる位置です。長い時間パレットの上で夕焼けの色を探していました。帰り道、石段を下る眼前に広がる夕焼けを見て、「あ、Iが描いたのと同じ色になってる！」と叫んだIちゃん、「お母さんにあげたい！」と言って乾きかけの絵を持ち帰ったCちゃん、二人の笑顔が忘れられません。

（左の絵 左上：I、左下：C、右：K）

2回目（10/8）の空。雲が度々日差しを遮りながら、ぐんぐんと流れていきます。



Rちゃんは刷毛で水平のタッチを重ねます。雲は布で絵の具を取り除き、紙の白を生かして描かれています。その刷毛跡からは、空の広がりや雲の連なり、流動感が伝わってきます。



Iちゃんは今回も夕日。輪郭をじわっと滲ませる工夫が生きています。前回に比べて赤の彩度が控えめなのは、この日の空気感を直感的に捉えているからかもしれません。



M君お気に入りのジャングルジムに、今回はK君も仲間入り。楽しそうに言葉を交わす場面もしばしば見られます。M君は、自作のスポンジ筆で空を点描した後、連なる帯状の雲を描きました。立体感、厚みが表現されています。（右）K君は、太陽に赤色を濃く塗りすぎて「しまった」という表情でしたが、ガーゼで押さえると下に塗っていた黄色が現れ、程よく馴染ませる事に成功しました。（左）

秋学期初回クラスに「夏休みの思い出」を描いてもらっている際、M君が、割り箸がないかと尋ねました。工作材料の余りを渡すと、カッターナイフで先を尖らせ、ペンのようにインクをつけ「こうやって細い線を描くんだ」と見せてくれました。（更にこの空の絵では、その先に小さなスポンジを取付けてスタンプのように使っています）。Cちゃんも、配布したガーゼを「てるてる坊主にする！」と言って輪ゴムで縛り、スタンプに加工していました。こうした自発的な工夫は大いに歓迎されます。絵画は自由な実験場です。いかに描くかという「方法」を自ら考える事は、絵画に挑む事を楽しくします。実際、両クラスとも、これまで全員がそれぞれ立派に、表現方法の発見や工夫を重ねてきています。

ところで、「褒めて伸ばす」というような言葉を耳にしますが、皆さんの絵をあえて褒めよう、などという風に考えたことはありません。描くという一連の行為の中に、必ず「おっ」と思わせるような、心を揺さぶる瞬間が幾つもあるからです。ただ、そうした幾多の瞬間の、一つでも見逃したくないという願望と、それらの全てを讃えたい気持ちがあるだけです。そしていつもワクワクしながら、あちらこちらでにわかにパッと灯る火を見つけては、油を注ぎたくなるような衝動に駆られています。

その眼差し、一挙一動、一筆一筆が、その瞬間の葛藤や喜びを映し出しています。絵は心の軌跡であり、鏡であり、保管庫です。つまり絵は、その瞬間に生きた作者自身なのです。だから、必ず見るものに何かが伝わるのであり、時に喜ばせ、元気づける事さえ出来るのです。

そして、これらの絵たちが、彼ら自身を励ます…。いつか、そんな日も来るのではないかと、想像するのです。

（文責 梁川健哲）

■ 「かいが」クラスの良さ

絵画は孤独、というイメージが、私にはあります。アトリエにこもって、何ヶ月も、ときには何年も、納得のいくまで自分の絵と向かい合う。作品が気に入らなければバツテンをして破り捨て、苦悩し、頭をかきむしる。そんな勝手なイメージがあります。

動物園に行くと、スケッチブックを持った人が熱心に鉛筆を走らせているのを、ときどき目にします。おお、すごく上手だ、と感心しても、「すごく上手ですね」と声をかけることは、なかなかできません。それは、その画家が見ず知らずの他人であるという以前に、私が声をかけることによってその鉛筆を止めさせてはならない、という遠慮がはたらくからです。もしかすると、画家も孤独、なのかもしれません。

孤独のなかで生み出される、切り立つような美しさがあることを、私は知っています。「孤高」や「独創」という言葉は、こういう美しさに向けられた讃辞にほかなりません。

絵画が孤独な営みであるだけならば、絵を描くのに、たくさんの人がいっぺんに集まる必要はありません。実際、描くだけなら、家でもどこでも一人でできるはずだからです。

では、「かいが」クラスの良さとは、いったい何なのでしょう。たとえば秋学期ではこういうことがありました。

「空を描く」という、二回分に渡った取り組みの際のこと。水彩絵具を使って「空」を描くために、自分がその空をどこから描きたいか、一番良い場所を探す時間がありました。

一回目の日、M君は、空を描く場所を、園庭のジャングルジムの上に決めました。遠くの空を木々の梢のさらに上から見晴らすには、ジャングルジムのてっぺんが一番なのだそうです。私も登ってみると、M君の言うとおり、空の奥のほう、山稜と接する辺りまで、眺めることができました。M君は、道具の置き場所に困りながらも、刻々と移り変わる空の表情を逃すまいと、熱心に筆を走らせてくれました。

二回目の日、やはりM君はジャングルジムの上にいました。前回から二週間経って、日が落ちるのが早まったので、夕焼けをより鮮やかに眺めることができます。しかし今回もっとも変化したのは、五年生のM君の隣りに一年生のK君がいることです。前は園舎の軒下から空を眺めていたK君。おそらく彼は、ジャングルジムの上のM君をも眺めていたのでしょう。今回はM君のすぐ隣りに場所をとって、さらに道具がひしめくことになりながらも、一番高いところからM君と一緒に夕焼け空を眺め、でもM君とはまた違った、特別で味のある空を生み出してくれました。

さて、一回目の日には、ジャングルジムの上にM君が居た一方で、五年生のCちゃんと一年生のIちゃんが、ブランコに隣同士で腰掛けて、木々の間から洩れる夕陽を描いてくれていました。赤く円く力強い夕陽。彼女たちの間には、温かい光が共有されているようでした。

二回目の日、Cちゃんはお休みでした。それでもIちゃんは前回と同じブランコで一人、じっと同じ夕陽を、また同じように赤く円く力強く、描いてくれていました。透明水彩で、夕陽の輪郭をうまく滲ませられたことを喜んで、私にその夕陽を見せてくれました。

「空を描く」の次の、「しぜんのもを描く」という取り組みの回では、K君はドングリを描こうとして、園庭の傍のクヌギの下でドングリを探していました。折しもハツとするような美しい夕暮れ時。K君は咄嗟に「空もかく！」と言って、やはりあのジャングルジムによじ上って、遠く山際の鮮やかな夕焼け空を描きはじめてくれました。以前と同じ場所です。他のみんなは、葉や枝など自分の描きたいものを見つけて、すでに教室に戻って描いていましたが、持ち帰れないようなモチーフはその場で描いても良いと先に説明してもらったので、もちろん園庭に残って描いてもかまわないのです。ただ、K君は一人です。彼の中では、心細さよりも、「この」空を描かねば、という想いの方が、強かったのでしょう。また、おそらくは、その心細さも、前回M君と一緒にだったジャングルジムという場所の温もりが、拭い去ってくれていたのでしょう。私も、絵筆をとるK君の隣りで、ただただ、美しい羊雲の夕映えを眺めていました。

少し経ちました。遠くで誰かの呼ぶ声が聞こえます。振り向くと、Iちゃんがこちらへ手を振りながら走ってきています。彼女もこのジャングルジムで空を描きたいのだそうです。上って来て、K君のすぐ隣りにスペースを確保しました。こうして、やはり道具はひしめき合うことになりました。K君は何も言いません。無心に空と向き合っています。Iちゃんは「この色はどうか？ こっちの色は…」と、横にいる私に向かってか、つぶやきながら、パレットで色を混ぜ合わせ、やはり赤く円く力強い夕陽を描いてくれていました。



いま、この場所は、親密な安心感で満たされている——そのとき私には、そう感じられました。時間と場所を誰かと共有したいと思うこと。これは純粹で根源的な欲求です。それを、「絵を描く」時間、「絵を描く」場所の共有として実現するとき、そこには、言葉を介した連帯とは、きっと別の貴重な価値が生まれるのだらうと思います。

「かいが」クラスとしてたくさんの人がいっぺんに集まることは、まずは、絵画の技法を学ぶこと、友達の絵から刺激を受けることなどにおいて、大きな意義があります。しかし、それと同等か、それ以上に、時間と場所を、「言葉」ではなく、「絵を描く」という行為を通して友達と共有することが、彼らの制作を根っここのところの下支えしているのではないのでしょうか。その温かい日溜まりが、絵画の（あるいは絵画でなくても）孤独に立ち向かう勇気すら与えてくれるののかもしれません。彼らは、絵画「について」学んでいると同時に、絵画「を通して」大切なものを体得しているのでしょうか。「かいが」クラスの良さは、そういうところにあるのだと思います。

（文責 高木 彬）

今学期は、主に俳句と漢字に取り組みました。

俳句では、暗唱から書き取りに重点を移しました。前回の山びこ通信で「生徒たちの言葉を大事にする」と書きましたが、今回それに「生徒たちの書いた文字」が加わったこととなります。「書くこと」は、幼稚園の頃にはまだなかった要素です。むしろそれを1年生の誇りだと思ってやってのける生徒たちには、「大人でもなかなかできないこと」だと思って驚かされます。

古いことを覚える時でも、受け取る自分が変われば、それは「より」新しいことに違いありません。幼稚園の頃に習った俳句を「文字」として見せ、「今だったら書けるかもしれない」と促すと、案の定、力一杯に取り組んでくれました。さらに、「(お手本を) 見ながら書いてもいい。でも見ずに書けたらもっとすごい」と一言添えると、やはり本来の精一杯をそこで試そうとする生徒が現れることは、頼もしいことです。また、一句書けたところで「できた!」と言う生徒には、「すごい。でももし全部の句を見ずに書けたら、もっとすごい」、そして「そこまでできて初めて『本当に覚えた』と言える」と答えることにしています。最初は「えー」と声が返って来るのですが、後でふと見てみると、黙々と実行している姿が目にとれます。「立てば歩けの親心」とは昔の人もよく言ったものです。誰でも「君ならできるはずだ」と応援されれば、嬉しい半分、大変な気持ちも半分です。毎週が「挑戦」です。挑戦と言うからには、時には逃げ出してしまうこともあります。一方それをどう励ますかが私にとっての挑戦です。

以前、「俳句を書きたくない」と頑なにしゃがみ込む生徒がいました。けれども私は、1年生だからこそ、事情という枝葉は取って考える必要があると考えました。事情を理由に「しなくてもいい」という方向を見せれば、結局は生徒の力を信じていないことになるからです。そこで事情があっても、「できないことができるようになる」という単純な物語だけを応援することにしました。すると、ある時からその生徒が目を見輝かせて俳句を見せに来てくれるようになりました。お家でも励ましてもらえたことが顔中に書いてあり、この生徒が「マラソン」という言葉を好きなこととも符合して、待った甲斐があったと本当に思いました。当然、私もまた生徒に言えるほど、自分が決して強い人間ではないことを知っています。けれどもそうした自分だからこそ、いつも不甲斐ない所を、誰かに励ましてもらってきたおかげで、今の私があるのだとも知っています。それは決して「尻を叩かれた」のではなく、「待ってもらった」という、その恩によるものです。1年生にとって、できることをさせることが、どんなに必要なことか、またそれができることを実際に信じてあげることが、どれほど不可欠であるか——が、私の課題であり反省です。

さて、いつの間にか、俳句の中の「青葉」「蛩」など、難しい漢字でも書き取る様子が見られるようになりました。それが今生徒たちの伸びようとしている所だと思い、次の段階として「漢字」を取り上げることにしました。このクラスでは、漢字を一字一字書くことを、『漢字マラソン』と呼んでいます。学校で習ったばかりの漢字は、彼らにとって最もホットな話題です。一方で「トラは何て書くの?」「キョウリュウは?」と、興味の対象を漢字でも表現してみたいという欲求も強くあります。中には、自分の名前が何年生にならないと習わないということを誇りにして書いてくれる生徒もいます。今しか付き合えない貴重な時間だと思います。また、本棚から何冊かしかない漢字の本を引っ張り出し、取り合いながら一生懸命書き写している姿は、まるで福沢諭吉の自伝に出てくるようです。そのうちに「卒園式にももらった漢字字典があるから、来週持って来る!」と思いつく生徒がいたことも嬉しい展開です。

「鉄は熱いうちに打て」と言うので、漢字の成り立ちもいくつか紹介することにしました。私も実はすっかり忘れていて、勉強し直して初めて知ったことがたくさんありました。たとえば、「東」の真ん中は、「田」ではなく「日」だと知り、「東」からその「日」を除いた部分に「木」が見えた時、昇って間もない朝日の絵がぱっと思い浮かびました。夕方の「夕」も、実は月が山の端にかかって、「月」の下の本が消えているところを表しています。そのようなことを、まるで取ってきたかのように話しました。すると、同じ漢字が出てくるたびに、生徒の方から「前に先生から聞いた!」とリポートしてくれるようになりました。嬉しいです。ぜひ同じ話を大人になってからもしてほしいと思います。

また時間の最後には、いつも紙芝居をしています。秋学期は怖い話シリーズでした。以前はお化けや妖怪が出てくるとすぐに耳を塞いでいましたが、今ではむしろ真剣に聞いてくれます。中でも『たのきゅう』に出てくる「うわばみ」(大蛇)が最も怖く、そのやっつけ方に興味があったようです。「もし帰り道にうわばみに出会ったら、自分ならどうするか?」と思って聞いてくれるので、話し甲斐があります。そう言えば私自身、お話が好きになれたのも、元をたどれば誰かにそれをしてもらったからにほかなりません。今度はそれをする番が自分に回ってきたのだと思うと不思議な感じがします。と同時に、当時のその「誰か」の気持ちになれることを、大変幸せに思います。

(文責 福西亮馬)

今学期は主に『推理クイズ』と『漢字』をしました。前号に『推理クイズ』のことを書きましたので、ここでは、新しい漢字の取り組みについてご紹介します。

まず、1年生ではやっている『漢字マラソン』というものをしました。すると、このクラスではまた違った展開が生まれました。まず、マラソンの挿絵入りの用紙が不要だということです。2年生はむしろ、白紙自体に「写経」する方が、真っ黒になった時の達成感を味わえるようです。中には一日で百字以上書く生徒も現れ、しかも一字一字が丁寧なことに感心しました。また、魚偏や金偏など、難しい漢字に興味に向かう生徒もいました。この場合は、字数では測れない情熱こそが立派です。

しかし、そうこうするうちに、ある一人の生徒が、今度は自分で漢字を作ってみることに興味を覚えました。見ると、なかなかよく考えた漢字を書いており、それを称揚して、みんなでもやってみようというクラス全体に持ちかけました。そこで、「岩」「雷」など、1年生で習った漢字だけでも、組み合わせるとたくさんの漢字が作れることを紹介しました。さらに、漢字を作る時のはずかしさ^{ひんじょう}も捨ててもらえるように、むしろ昔の方がびっくりする字を作っていることも伝えました。それは『品字様』と呼ばれるものです。たとえば「晶」「轟」「犇」など、ちょうど品の字の様にできる漢字のことです。ちなみに2年生で習う漢字の中で一番画数の多いのは「曜」の18画です。そこで、轟の画数を数えてもらいました。すると48画もあり、さすがに物知り^{ひんじょう}のみんなでも驚いたようでした。

さて、みんなで取り組むと、面白い創作漢字がたくさん飛び出しました。そこで一番自信のある作品を一人ひとつずつ紹介してもらいました。また、はがき大の画用紙にいくつか書けたところで、ホッチキスでとめてみました。すると今度は「本」になることを知って、生徒たちの間ではがぜん、またやる気が出てきたようでした。こうやって自分の中で飽きるまで遊ぶことは大事だと思います。

鳳

たいふう
いみ 台風は、風と雨のできるから
かきじゅん 几を大きく書き、虫にノを
上に書く。そのあと、下に、雨をかく。

闕

カーテン
書きじゅん
(16画*)

*の漢字は、1画ずつ
の丁寧な書き順を付し
てくれています。(残念
ながら紙面には掲載で
きませんでした)

杰

よみ ねっとう こぼす
書きじゅん 丨 ㇀ 水 杰
杰 にする。水を 杰す。

窘

よみかた ・ごみばこ・おとしあな
れい文 窘にする。窘にはまる。
書きじゅん (16画*)

𪛗

はね
おきにいりの漢字。

𪛗

マグマ いみ①火で太陽のようについ。
②太陽と同じぐらいあつい。
文しょう 火山がふんかして𪛗がながれる。
書きじゅん (20画*)

さて春学期に引き続き、素話では『ギリシア神話』をしています。今回は星座にちなんだものを取り上げました。「ポルックスとカストル」「ヘラクレス」「ペルセウス」「ペレロポン」といった、日本の小学生にとってそれほど聞く機会のない西洋の昔話が、むしろ2年生たちの好奇心を喚起することを知って驚きました。望外の喜びです。

最近では、獅子の頭、山羊の体、蛇の尾を持ったキマイラという怪物が、ペガサスに乗った英雄(ペレロポン)によって倒される話をしました。その時、「自分だったらこうやって倒す!」と、特に男の子たちの間で熱心な会話がなされ、好ましく思いました。ほかにもメドゥーサ、ヒュドラといった怪物は、若々しい空想を刺激してやまないようです。

また、このクラスではゼウスの名前はすでにおなじみとなりました。「ゼウスの子どもがヘラクレスで、大鷲が使いの動物で…」とむしろ生徒たちの方が私に説明してくれます。しかもそれが自分の言葉となって自然と発せられていることに驚かされます。このような広い好奇心を持った彼らを、ふところ深く、ギリシア神話が包み込んでくれていることを幸いに思います。

(文責 福西亮馬)

『ことば』 3年生(金曜1限) 担当 小林哲也

秋からはじまったこの「ことば3年」のクラスでは、「物語との出会い」と「ことばの楽しみ」をテーマに、生徒二人と少人数ですが、にぎやかに勉強をすすめています。

物語は「名作」といわれるような童話を中心に選んで、その読み聞かせを行ったり、あるいは朗読してもらったりしています。現在、こども向けのテレビ番組や商品が増える一方で、「古典的なもの」に触れる機会はどんどん失われているのではないかと思います。放っておくと失われるこのような機会を、このクラスでは積極的につくっていきたくしております。例えば芥川龍之介や宮沢賢治などの作品をとりあげましたが、どれも私自身が子どもの頃に読んで、印象に残っているものです。二人の集中ぶりは、こちらもおどろくほどのもので、何かを感じたり、またそこから色々と空想が広がるようです。

思うに、物語というのは、聞いたらその場で消費されて消えてしまうようなものではなく、いわば蒔かれる種のように子どもの中にふり積もっていくものです。種はすぐ芽を出すものもあれば、年月を経た後に熟成して実を付けるものまで様々です。秋は収穫の季節ですが、読書の季節でもあります。様々な果実がなってくれるように、毎週色々な本の種を蒔いています。物語だけではなく、例えば詩の種もそこにまじっています。詩の選択に関しては、内容や意味もさることながら、響きとリズムの美しさや心地よさを重視して、なによりことばへの親しみを育んでもらうことを考えています。「のみのびこ」などに関しては、同じ形式の詩を創作もしました。意味の伝達手段にはとどまらない、ことばそれ自体の楽しみを感受してくれたようです。こうしたことばの楽しみは、芽吹き、花開くための栄養となるものかもしれないと思っています。

朗読した物語については、その場で感想文を書いてもらうようにしています。多くの方は「感想文を書け」と言われて辟易した記憶を持っているのではないかと思います。何を書いていいかわからない、自分の気持ちを表現するのは恥ずかしいなど理由は色々あるでしょう。ですが、書くことに関してのハードルの高さが、そもそもの大きな要因ではないかと考えられます。日頃から文章をこまめに書いていけば、そのようなハードルの高さは確実に下がっていきます。「感想」は「こう書けば正解」ということが一義的にあるものではないので、二人とも少しとまどうところもあるようですが、文字を重ねることで、書くことにも表現することにも、おっくうだと感じないようになってくれるのではないかと思います。他に、漢字練習や熟語表現などの学習もまじえつつ、ことばの勉強はすすんでいます。

(文責 小林哲也)

『ことば』 3~5年生(金曜1限) 担当 高木^{あきら} 彬

春学期に引き続き、このクラスでは生徒それぞれに、物語の創作を進めてもらっています。

それに加えて、春学期と同様、クラスの最初に少しだけ時間をとって、物語を読んでいます。読むと言っても、生徒たちが物語を書きはじめる前のウォーミングアップとして、私が絵本や児童文学を読んで、それを楽な気持ちで聞いてもらうのです。これが、生徒たちには、創作への導入としては合っているようです。このクラスの生徒は、三年生が二人と五年生が二人に分かれているので、難易度の観点から、物語選びには苦労するのですが、いま読んでいる『どうぶつえんのいっしゅうかん』(作・斉藤洋)は、平易な言葉で書かれていながら、生徒たちを惹き込む力がある、児童文学です。題名の通り、動物園の動物たちの様子を、曜日ごとに毎日違った角度から眺めていくもので、みんな楽しみにしてくれているようです。Kちゃんは、自分でも同じ本を借りてきて、自ら申し出て朗読してくれています。また、Jちゃんはあるとき、自分の物語を書いている途中に、『どうぶつえんのいっしゅうかん』、かして!と言って、じっと読んで、「これ、まねしてもいいの?」と尋ねてくれました。聞くと、物語の内容をそっくり写すのではなく、その物語で使われたアイデアを自分の物語にも取り入れたいのだそうです。そこですぐさま「そんなん、いいに決まっているやん!」と声を発したのは、私ではなく、あの、朗読をしてくれているKちゃんでした。「そのために読んでるんやから。」

物語を読むことは、物語を書くことにつながります。クラスの最初にみんなで一つの物語を読む時間は、そのあと自分たちの創作へと飛翔していくまでの、温かい寝床であり、滑走路なのだと思います。

物語を読み終えると、生徒たちは原稿用紙に向き合い、一心不乱に鉛筆を走らせてくれます。Aちゃんは、『2009年誘拐事件』というミステリー小説の第一部を完成させ、現在はその続編と、別の新しい物語を、並行して書いてくれています。Aちゃんの文章は、ミステリーの展開に欠かせない論理的な巧みさと、独特の静けさを、兼ね備えています。続編を非常に楽しみにしています。

Jちゃんは多産で、数多くの物語を生み出してくれています。また彼女の物語は、登場人物が多く、会話文も多いです。最新完成作の『なぞの名探偵』も、きちんと一本の筋がありながらも、イメージが玩具箱のように豊かです。ただ、この作品で初めて、これまで会話文のみで展開していた彼女の物語に、「と言いました。」というような地の文が表れはじめました。これは良い傾向だと思います。

創作においてRちゃんがいつも主題としているのは、「友情」だと思います。夏祭りの露店の出店へむけて友達同士が心を一つにして取り組んでいく様子が、最近完成させてくれた『夏祭り』に描かれていました。前作の『サッカー』でも、やはり「チーム」ということが大切にされていました。彼女は物語に、友情の大切さを、メッセージとして込めているようです。

Kちゃん是一个の物語をじっくり書き上げるタイプの生徒です。以前書いてくれた『おやまの学校』は長編でした。山の学校「ことば3～5年生」クラスの様子を楽しく描いた物語で、読んでいて思わずニヤリとさせられるような、周囲への洞察に満ちた作品でした。現在書いている物語も、徐々に原稿用紙の枚数を増やして、いまや分厚い本になりつつあります。

(文責 高木 彬)

『ことば』 4・5年生(木曜1限) 担当 福西亮馬

このクラスでは、授業の前半に毎週1問『推理クイズ』をしています。1つだけ例にとってご紹介します。

ある、つぎはぎだらけの服を着た女が、畑を耕していると、宝石のぎっしり詰まった箱が出てきた。けれどもその女は、だれにもそのことを話さずに、また宝石をお金にかえることもしなかった。そうして10年がたった。ところがその年のある日、女は突然宝石をすべてお金にかえ、一躍大金持ちになったのだ。新聞がそのことを報じると、世界中の人が驚いたのは言うまでもない。では、なぜ女はすぐに大金持ちにならなかったのだろうか？

これに対し、生徒たちと以下のようなやりとりをしました。

「お金にかえたくなかったのですか？」「いいえ」

「かえたくても、かえられなかったのですか？」「はい」

「10年目のある日、何かが起こったのですか？」「はい」

「女の人は、その日が来ることを知っていましたか？」「いいえ。でも待ち望んでいました」

「女の人は貧乏でしたか？」「はい。ただ以前は普通の暮らしをしていましたが、突然持っていたお金が使えなくなってしまったのです」

「記憶喪失とか、そういう病気にかかっていたのですか？」「いいえ」

「女の人は宝石やお金の価値は知っていますか？」「はい」

「近くに物が買えるお店がなかったのですか？」「それは鋭い質問です。そうです、店は一つもありません」

「念のために質問。女の人が住んでいたのは、町なかですか？」「いいえ！」

「では、田舎ですか？」「はい、でも田舎よりずっと人口が少ないです」

「車とか電車は通っていましたか？」「いいえ、それもあります」

「まわりは海ですか？」「はい」

「分かった！ それって、〇〇〇に住んでいたから？」「そう！ 正解です」

実際はもっと色々な質問と紆余曲折とがあったのですが、残念ながら割愛いたしました。その後、「女の人はその〇〇〇に漂着して、10年目に救助されたの？」という質問が出て、「はい。そして見つけたのは、かつて〇〇が埋めた宝でした」と答えると、「そっか。なるほど～！」という嬉しい声が返ってきました。

こうした推理クイズが「ことば」の勉強になるのは、一人の想像が自分の中だけで終わらず、全員に提供される点にあります。その媒介となるのが質問であり「ことば」です。

各自、名探偵を気負って、すぐ答が出る時もあれば、なかなか出ない時もあります。そんな時は、「あと5分で終わりにしようか」と切り出すと、生徒たちの表情に葛藤が表れます——(答は知りたいけれど、もう無理。でもあきらめたくない…でも…)と。そのようにみんなが困っている時、「間違っているかもしれないけれど…」と前置きしながらでも勇気を振り絞って質問を出してくれる生徒がいます。そのことばこそ価値があると思います。高学年になるにつれて質問の回数が減っていくのが普通ですが、もし反対にその流れに逆らって、自分のことばの殻を徐々に打ち破っていくことができれば、中学、高校、社会と環境が変化していても、その先に渝らぬ自信を持ち続けることができるでしょう。

さて、後半はお話作りの時間に充て、画用紙で絵本を製作しています。きっかけは、去年、浅野先生が担当された時、みんなの作品を見せてもらって「ここまでできる」と驚いたことです。これはぜひ 2 作目にも挑戦する意味があると考えました。

A 班は、女の子 3 人のチームで、『ふしぎなお買い物ごっこ』という題です。もうじき幼稚園で『おかいものごっこ』があるので、自分たちも「いらっしゃいませー」をしていたのを思い出してのことです。さて脚本はみんなで考え、E ちゃんと M ちゃんが文章を、A ちゃんが絵を担当しています。「私たちの魔法の出て来るお話にしよう！」「それ、いいアイデア！」と和気あいあい。またさすがは女の子同士、気を使いながらもこだわりがあって、たとえば 10 人ほどの登場人物の絵にはそれぞれ「自分の原案を採用してほしい！」と主張し、どうなることかなと思ってハラハラ・ドキドキしました。そんなこんなで、表紙と人物紹介、目次ができあがり、今は第 3 章までさしかかっています。

B 班は、H 君と私の男チームです。こちらは淡々と書き進めています。題名は『未確認動物 捕獲大作戦』です。これは H 君が夏休みに書き上げてくれた原稿用紙 22 枚という大作の絵本化です。当然 12 ページではかききれないため、「三部作にしたらどう？」と私が提案すると、H 君は「それいい！ ハリー・ポッターみたい」と喜んで受け入れてくれました。内容は、未確認動物の研究者である虎丸博士が、『瞬間移動機械』というものを発明し、それに主人公たちが飛び乗って、ツチノコ（日本のどこか）やネッシー（イギリス）を探しに各地を飛び回るといふ、まさに少年時代の夢と憧れに満ちた、貴重な作品となっています。

どちらの作品も完成が楽しみです。

(文責 福西亮馬)

『ことば』 5 年生(火曜 2 限) 担当 高木 ^{あきら} 彬

このクラスでは秋学期も、基本的に春学期の取り組みを引き継いでいます。個々の取り組みについての考え方などは、すでに春学期の「山びこ通信」に書かせていただいておりますので、ご存知でない方はそちらもあわせてご覧いただければと思います。

クラス前半の朗読の時間では、秋学期では新たに、スウィフトの『ガリバー旅行記』を読んでいます。おそらく名前は知っていても、きちんと本の形で読んだことがない、というのが、この手の名作にはよくあることです。クラスの生徒たちも、なんとなく見聞きしたことはあるみたいでしたが、しっかりと読んだことはないようです。

春学期に『オズの魔法使い』を取り上げたときもそうでしたが、読みすすめて行くと、どこかで見知った場面に出会います。出会うと、「あ、これ知ってる！」となって、いつかのおぼろげな印象が、物語の流れのなかに、がっちり繋がることになります。物語を読む楽しみは、その内容にあると同時に、読み進める行為のなかにもあるのでしよう。

たとえばガリバーがリリパットたちに体を地表に縛り付けられるシーンを読んだ時は、みんな「あ、これ、これ！」というように、楽しそうに顔を見合わせていました。既知の場面に出会う感覚を、クラスの仲間と共有できることが、親密で温かい読書経験をもたらすのだと思います。またそれが、未知のものへ向かう際の、足場になるのだと思います。私も含めて四人のこの小さなクラスで、代わる代わるに朗読を継いでいく時間は、山の学校のクラスでしか成り立ちえない、貴重な時間です。

自分の朗読したページを自分で筆写して、最終的にそれらをまとめて、自分たちの文字による「ことば 5 年生クラス版『ガリバー旅行記』」を完成させようという取り組みも、春学期にも増して、波に乗っています。春学期の『オズの魔法使い』のときは、二週間に一度くらいのペースで筆写の時間を設けていたのですが、そのときの彼らの取り組み方を見ていて、秋学期からは毎回おこなうことにしました。すると、「今日読んだところは、今日筆写する」という意識が生まれて、むしろより真剣な筆写の流れができてきているように思います。

他にも、クラスの後半では、隔週交替で、「ひみつ道具」の制作（創作）と、「漢字（熟字訓）」の学習を行っています。

最近では、ひみつ道具の創作では、毎回、なにかテーマを設定するようにしています。クラスの生徒たちは、それぞれが、独自の世界を内に秘めています。しかし、それを表現するときには、たとえば「未来の乗り物」や「秋」といった大きな括りをクラスで共有しておくことが大切だと思うようになりました。クラスには連帯感が必要ですし、それがあってこそ、各々の独創性が明瞭になると思ったのです。

また熟字訓の取り組みは、ある回では、「陰曆」について学びました。各月の呼び名のなかには熟字訓ではない通常の訓読みのもものもありますが、それも含めて、「睦月」から始まる漢字の読み方と、その由来について触れました。由来を知ると、言葉がわかります。丸暗記に依らない、本当の学びの楽しみが、そこから開けます。

(文責 高木 彬)

『ことば』 6年生(金曜3限) 担当 高木 彬^{あきら}

このクラスでは作文に取り組んでいます。基本的な流れは以下の通りです。

まず作文の取っ掛かりとなるような文章、映像、音楽などを経験し、あるいは自身の体験・思い出などを想起し、次にそれについて対話し、対話を踏まえて実際に原稿用紙に作文してもらいます。完成したら作文を発表し、講評を行ったあと、生徒どうして原稿用紙を交換してお互いの作文の添削を行います。ここで生徒は、文章を客観的に審査する眼を養います。互いの添削のあとは、私が地の文章と添削の文章それぞれに朱を入れます。自分の作文が、同級生と先生の両方に評価されるわけです。最後に、これらを踏まえて、清書を行います。清書原稿には、私がコメントを付けてお返しします。

秋学期からは、自由に表現することから一歩踏み込んで、作文する際に、時間と字数に《制限》を設けています。実際、作文をする場面においては、日記などの私的な文章を除いて、ほとんど必ず《制限》がつきまといまふ。そうであるならば、むしろその《制限》を、写真や絵画におけるフレームのように、表現の《手がかり》として自分のものにしていくことが重要になってきます。常に「全体」を想定しながら、頭のなかに沢山ある書きたいことのどの部分を選択し、それをどのように全体のなかで分割・構成し、書きながら言い換え、削減し、あるいは付加していくか。こうした表現力を積極的に磨くために、《制限》がひとつの原動力になるのだと、私は考えています。

これに生徒は、非常な真剣さをもって取り組み、応えてくれています。彼らそれぞれの作文の良さを伝えるため、実際の取り組みの結晶を、ここに載せておこうと思います。(いずれも 400 字/30 分)

ボーイスカウトのキャンプ

T.K

ぼくは、夏休みにボーイスカウトのキャンプに行きました。それは六泊七日というすごく長いキャンプです。行った場所は舞鶴です。今から、その中でも一番つらかったことをしょうかいします。

ぼくは、キャンプの中のお出かけハイクが一番つらかったです。なぜなら、キャンプ場から二十キロ位はなれた浜まで行き一泊して帰ってくるということだからです。それも六泊七日の荷物をほとんどもっていかないとだめだからです。そしてキャンプ場を出たと思ったら道をまちがえて、また一からという時もあり、どんどん歩いて声が出せる元気がなくなってきました。けれどここからが地獄で、山の名もなき道をずーと歩いているとコンクリートの道がうらやましくなってきました。そしてやっとなつた時には目まであかなくなっていました。ああ、これからご飯作らな。

何を伝えようとしたか

U.K

ぼくは今日、「POWERS OF TEN」という動画を見ました。この動画の内容は、アメリカのシカゴでピクニックをしている男性を画面の中心にして画面が宇宙まで拡大したり、男性の体の中の原子核まで縮小したりするものです。

ぼくはこの動画の監督が何を伝えようとしたのかと考えました。たぶんこの動画を通して、子供たちに人類の発展の拡大、縮小の限界を伝えたかったのだと思います。なぜならこれで人類の文化の限界に気付き、この記録をぬりかえようとする心を子供たちに持たせて、夢を見つけさせることができるからです。

人はいつかは記録をぬりかえます。だからぼくも自分自身の最高記録をぬりかえて行きたいと思っています。そのために、この動画のような内容のもので、いろいろ限界を見て行きたいです。

(文責 高木 彬)

かず1年Bのクラスは、引き続き福西先生と交替で分担しながら勉強すすめています。秋学期は、足し算などでのつまずきの解消と、難問への取り組み(迷路)を同時に進めています。

例えば「 $2+4=\square$ 」と「 $2+\square=6$ 」は大人からすると、一見同じもののように見えます。しかし、前者は「2に4を加えるといくつか」ということを表すのに対して、後者は「2にいくつ加えると6になるのか」ということを表して、微妙に式の把握の仕方は異なります。 $2+\square=6$ の場合、すんなり解ける子もいる一方で、多少混乱してしまう子もいました。二つの形式をくりかえし交互に解いてみることで、みななどちらもしっかり解けるようになりました。足し算では、このように小さなつまずきをうまく解消できるよう勉強をすすめています。

他方春から続けている迷路や間違い探しは、難問への挑戦を積極的にすすめています。迷路には、方向性をもたせ、「○」「△」「□」の順に進むというルールのものに取り組んでいます。徐々に難しくしていますが、簡単なものから段階的に取り組むことで、難問にも「前のは解けた!」という気持ちで取り組めるようにしています。現在、大人でも難しいようなレベルのものに突入しつつあります。間違い探しでは、構成要素を見極めて同じ部分を比較するという技が身に付いて来ています。間違いが微細な点におよんでも、みんな根気よく比べて探し出していきます。

冬学期も、中だるみや慣れによる甘え、気の緩みには注意しつつ、真剣に取り組む姿勢を応援していきたいと思います。

(文責 小林哲也)

「楽しむことを学ぶこと」

1年生のクラスでは、計算プリントと迷路のほかに、後述の『タッチパネル』『数当て』『石取り』など、10や20の数量的なイメージを掴むゲームをしました。

まず計算では、春学期からの変化が徐々に見られます。 $2+5$ のような足し算は何なくできるようになり、今は $8+5$ のような10をこえる繰り上がりを中心です。一方、「引き算もできるよ!」という声も多く聞かれるようになったので、併せて「10を作る練習」をしました。2を見たら8、6を見たら4というように、10の補数(ペア)が思い浮かぶことで、繰り上がり(下がり)をスムーズにできるようになることが狙いです。この10をただちに作れる経験は、このあと筆算をする上でも自信の源になります。



10までのタッチパネル

『タッチパネル』は、パネルにかかれた数字をルールに沿って触っていくというものです。一番単純な「1から10まで順に」のほかに、「偶数だけを」「10から逆順に」「左手で」といった変化が楽しめます。一人の生徒が熱心になると、次第に周りの生徒も乗ってくるのがこのゲームの特徴です。タイムを測ると、どの生徒も以前の自分よりも必ずタイムが良くなることで「やった!」と喜んでくれます。そのうちに、前もって1、2、3、4…と最初の手順を練習したり、8、9、8、9…と自分が苦手な手順を反復する生徒が現れました。この工夫こそが素晴らしいと思います。

また、『数当て』というのは、次のようなゲームです。

全員におはじきを配り、そのうち3個まで手の中に隠し持つ(空っぽでもかまわない)。そして全員の合計を予想し、その個数を宣言する。誰が先に宣言してもかまわないが、宣言された数を次の人は言えない。最後に全員が手のおはじきを見せ、当たった人がそれを全部もらえる。全員はずれた場合は、一番多くおはじきを手を持っていた人が、より少ない人からそれぞれ1個ずつもらえる。

実はこのゲームは、私が今の生徒たちと同じ頃に喜んでしていたものです。さて、たとえば4人なら、おはじきの合計は12までを予想することになります。またおはじきを4つまで持てることにすれば、より合計を当てにくくなります。最初は適当な数字を言うところから始まりましたが、10分もすると数量のイメージが掴めてきて、「13」「15」「14」と合計を1つ違いで狙えるようになってきたことに驚きました。また参加人数が多いと、「合計を当てる」ことよりも「全員がはずれた時、より少ない人から1個ずつもらう」ことが意外と得なことに気付き、おはじきを3つ持つ生徒が増えてきました。そうすると逆に合計が当たりやすくなるので、全員外れることを狙って、わざと少ない数を宣言するなどのフェイントも見られました。

ほかには『石取り』をしました。これは10個のおはじきを2人で1~3個ずつ取り合い、最後の1個を

取った方が負けというルールです。このゲームには、先の『数当て』と違って実は偶然はなく、「考えた者」が必ず勝つ仕組みになっています。そのことに薄々気付いた生徒は、先生の「勝ち方」を観察するためにわざと負けるといった、発想を逆転させていました。

このように秋学期は、20までの数で、遊べるだけ遊んでみました。なぜ遊びを通して学ぶかという、それは、やがては自分一人でも、学ぶことで遊べるようになってほしいからです。そうすればこの先、勉強との付き合いがずっと長くなります。勉強で大切なのは「楽しむことを学ぶこと」です。そのことを頭に置きながら、冬学期も引き続き見守っていきたいと思います。

(文責 福西亮馬)

『かず』 2年生(水曜2限)

浅野直樹
担当 岸本廣大

夏休みを経てこの秋学期の授業を再開しましたところ、生徒たちの大いなる成長にまず驚かされました。これまでの同じようなパズルを用意してくるとすぐに解き終わられ、もうないのかとせがまれるほどでした。本当にこの時期の成長は速く感じます。

このかずのクラスの取り組みを通して、人生観といいますか、それくらい深い部分での成長も見られました。それが窺える発言をいくつか紹介します。

「人生回り道」

全てのマスを通るように同じ数字同士を線で結ぶナンバーリンク(図1)をしているときのS・T君の発言です。このパズルは線が交差しないようにすべてのマスを通りつつ同じ数字同士を結ばなければなりませんので、回り道をするのもしばしばです。確かに人生も同じようなものかもしれません。

「もう一人の自分が見えた」

難しいイラストロジック(図2)を解き終え、コツを聞かれたときのS・N君の返答です。これは自分を客観視できているということですね。イラストロジックは論理だけで解くことができるように作られているので、もう一人の自分を見るかのように客観的に解くのがコツだと言えるでしょう。

「できるところからやっけていくと気づいたらできている」

同じくイラストロジックに取り組んでいるときにH・H君が気づいてくれました。イラストロジックに限らず、数学の試験を受けるときでもできるところからやるのは鉄則です。そうしてできるところから進めていくと気づいたらできているということが多々あります。人生においても、特に現代では十年先、二十年先を見通すことは難しいですが、できるところからやっけていくと道は開けているものかもしれません。

「タテをよく見て、ヨコをよく見て」

もう一つイラストロジックからT・T君の発言です。これもイラストロジックのコツをよく伝えられています。タテだけ、あるいはヨコだけを考えるのではなく、タテの数字とヨコの数字の両方をよく見るということです。このように多角的に物事を見るということは数学に限らずあらゆる学問に通じるところがあります。いろいろなところに気配りするという意味では実生活に応用することもできます。

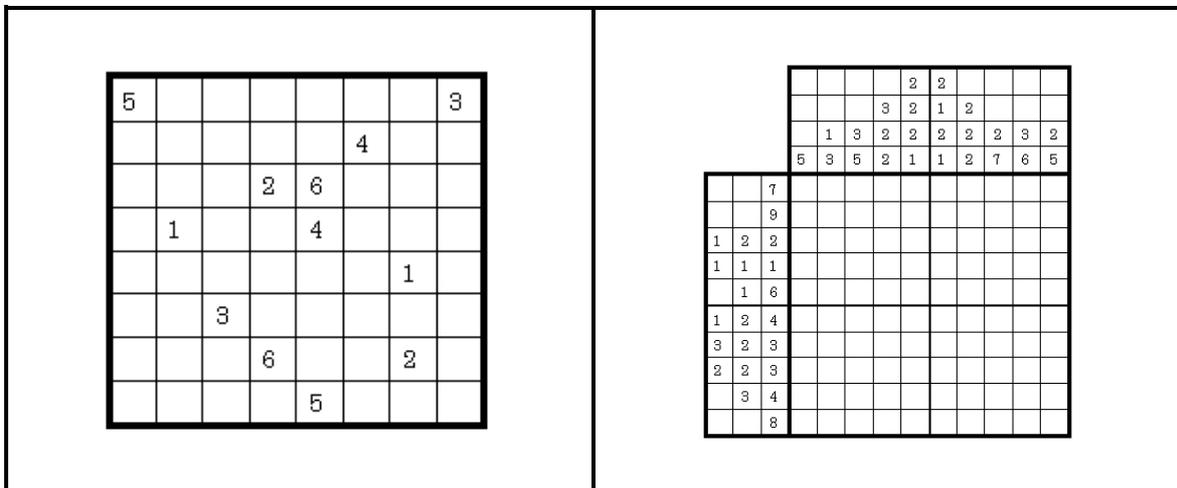


図1

図2

(文責 浅野直樹)

みなさんは、消しゴムの消しカスについて、どう思いますか？

いきなりのおかしな質問に、面食らうかもしれませんが、山の学校で教えていると（特に小学生ですが）、私はその消しカスについて思いを馳せることがあります。その考えの一部を、ここで少し書き連ねてみようと思います。

このクラスに限らず、小学生のクラスでは、授業の最後に消しカスをゴミ箱に捨て、机の上をきれいにして帰るようにと、子どもたちに言い聞かせています。これは私のみが言っているわけではなく、マナーとして、山の学校では常日頃から見られる光景です。それでも、子どもたちの中には、お家での晩御飯が待ち遠しいのか、そうした片付けを煩わしく感じているような様子も時々見られます。子どもたちは、消しカスの片付けにあまり良いイメージを抱いていないのかもしれませんが。面倒くさがりだった私の幼少期を思い返せば、そのような子どもたちの気持ちも、わからなくはありません。私自身がそのように思っていた行為を、子どもたちに強制することに、私はあまり気が進みませんでした。では、一体どうすれば良いのでしょうか。

いろいろ考えを巡らせ、消しカスについて子供たちの持つイメージを良くしてやるのが大事なのではと、私は思うようになりました。そもそも、何故消しカスが出るのでしょうか。クラスの様子を見てみると、消しカスがたくさん出るのは、消しゴムを使うことが多いからです。つまり、子どもたちが問題に対して真剣に取り組み、試行錯誤しているからなのです。こう考えると、消しカスとは、どれだけ真面目に取り組んでいるかを示す指標の一つとなるのです。例えば、ある子が一つのパズルに取り組んでいる時、それほど難しいものではなかったのに、どうやら思考の落とし穴に陥ってしまったようで、どうしても解けませんでした。私や浅野先生からのアドバイスを受けては、書いては消し、書いては消し、何度も何度も繰り返すうちに、消しカスは積もりに積もり、問題用紙すら破けてしまうほどでした。このような過程を踏まれば、ようやく問題が解けた時の消しカスは、その子にとって決して単なるゴミではないのです。それは寧ろ、自らの頑張りを示してくれるものあり、自ら努力を具現化したものといえるのではないのでしょうか。

このような意識を消しカスに対して持ってもらうと、少しは消しカスに対して印象が良くなるように思います。そして、そうした印象を持つと、最後にその消しカスをまとめて捨てることで、自分の努力の跡が確認できることになるのです。「今日はこれだけ頑張った！」ということが、目に見えてわかり、子どもたちにとって良い励みになるのではないのでしょうか。

そこまで想像は膨らんで、でも逆に、消しカスを捨てるのが嫌になって、そのまま残しておこうと考える子がでてくるかもしれない…、と今度はしぼんでしまうのですが。

（文責 岸本廣大）

『かず』 3年生A（火曜2限）

担当 岸本^{こうた}廣大

秋学期、このクラスに通っている子どもさんは、一つの弱点を克服することができました。それは、春学期から取り組んできた「時間」の問題です。最初は、例えば「100分は何時間何分？」といった、単純な単位の変換の問題にもてこずっていたのですが、秋学期では、文章題で「10時40分から12時20分までの時間は？」という問題を、解くことができるようになりました。今では、クラスのときに時計を見て、「今何時だから、後何分で…」というように、時間を自らの生活に取り込んでいるようです。何よりも私が嬉しかったのは、そのような時間の計算を、筆算で解くことがとても大好きになってくれたという点です。時間の筆算は、くり上がりとくり下がりが、10進法ではなく60進法のためにややこしく、普通は辟易してしまうものです。それでも、普段から筆算が大好きだということもあり、そのややこしい時間の筆算を、楽しみながら自分のものにしてくれたのは、教えていた身としては、とても嬉しいことでした。

春学期と秋学期を通じて克服した「時間」の問題は、私たちに新たな課題をも示してくれました。それは、文章題における式の作り方と、計算についてです。文章題は、「時間」の問題として、出題したとき、ある問題で足し算を使うのか、ひき算を使うのか、またどの時刻がひき算の先に来て、どれが後に来るのか、そこを整理するのに手間取っていた様子が窺えました。「時間」の問題では、一緒に図を描いて考えながら、式を作っていました。それがひとりでもできるようになることが、望ましいことでしょう。そこで、秋学期の残りは、こうした文章題、特に式をつくってもらうことをメインに問題演習を行いました。それを通じて、式の作り方の規則が論理的にわかってもらえるようにしようと思います。

また計算については、二桁の数の暗算での正確性が問題でした。例えば、「 $15+35=$ 」や「 $15-8=$ 」といった問題を、暗算では間違えることが何度かありました。二桁のたし算やひき算は、大体の場合、一定のパターンを覚えてしまうことが、正確性を上げる鍵だと思います。例えば足して15になるのは $6+9$ 、 $7+8$ 、…などがわかれば、先ほどの「 $15-8=7$ 」がパッとでてくるはず。まだ三年生なので、そうしたパ

ターンには不慣れなのかもしれませんが、今はその発見を、喜ぶべきでしょう。早いうちにその弱点を発見できれば、より早く克服できるのですから。この新たな弱点を意識して、秋学期の残りは25マス計算や49マス計算などをやってもらっています。これで、冬学期までには計算の正確さが増し、またスピードも早くなるのではと、私は期待しています。そう、秋学期までに「時計」の問題という弱点を克服できたように。筆算が好きだという彼女が、もっと計算や算数の問題が好きになってくれるよう、解く楽しさが筆算以外にも広がってくれるよう、新たな弱点を克服していこうと思っています。

(文責 岸本廣大)

『かず』 3年生B(水曜2限) 担当 う え お ま さ み ち 上尾真道

秋学期はまず春学期のやり方を改めることで開始しました。春学期は授業を前半と後半に分けて、前半をドリルなどの時間、後半をゲーム性のある学習の時間としていたのですが、このやり方ですと後半のゲームやパズルなどの“楽しい勉強”の、“楽しい”の部分が強調されてうけとられるようになり、いささか真剣さを欠くことが出てきました。またそうした雰囲気は結局授業全体の雰囲気となり、前半のドリルの時間にも影響を及ぼすようになってきました。“楽しい”ことは結構ですし、私も子供達が楽しんでいるのを見るのは好きなのですが、それがただの“楽”に流れる時にはやはり注意する必要があります。そこで秋学期はこの区分を取りやめ、一時間の授業全体が真剣な学習の時間であることを思い出してもらうように努めることから開始したというわけです。

この方向転換は存外うまくいきました。新たなやり方に最初は不平など出るかと予想もしていたのですが、そのようなこともなく、子供達はかえって落ち着いて授業に取り組めるようになったように感じます。授業時間を区切らないことによって集中を持続できる時間が増えたのが効果的だったように思います。

一方で、こちらが用意する課題プリントも、最初から少しパズル性のあるものを渡すようにしました。その一例としては、和算で言うところの「油わけ算」の問題があります。美濃の斎藤道三が大名になる以前の油売りの際に披露していたという逸話もある「油分け算」とは、二種類の異なる大きさの樽(例：3升と7升)を使い、中身を色々とし変えて決められた分量(例：4升)を量るというものです。西洋にも類似の問題があり(その場合油ではなくワイン)、映画『ダイ・ハード3』でもブルース・ウィリスが挑戦していました。余談はともかく、足し算や引き算を効果的に使用して解くこの問題は、本来、「最低数の手順で」という制限がつくものですが、子供達にとっては問題のエクセレントな解決を目指すよりは数を色々といじることによって馴れてもらうことが大事と考え、特製プリントを使用して気の済むまで試行錯誤を繰り返しながら進めてもらえるようにしました。またある程度問題に馴れてからは、自分で升の大きさの数字を決めて問題を作ってみるということを行いました。これをやると、例えばあまりにも簡単に解けてしまったり、また全然解けなくなったりということが起こります。それに対しどこを直せばいいかなど考えることで、よりいっそう数字のからくりに興味を持ってもらうことが目的でした。

このような問題に頭をひねりながら取り組み、できた瞬間に目を輝かせている子供達を見ると、やはりただの“楽”ではないような“楽しみ”を子供達もちゃんと分かっているのだなと改めて感じた秋学期でした。

(文責 上尾真道)

『かず』 3・4年生(金曜2限) 担当 う え お ま さ み ち 上尾真道

『かず』3年生Bの授業と同じく、こちらでも春学期とはやり方を変えて、一時間すべてを使ってひとつの課題に取り組むという方針に変更しています。子供達にとって一時間の集中というのは、私の感触ではかなりギリギリのところのようですが、それはギリギリ可能だという意味でもあります。最初から最後までひとつの課題に没頭した際に充実感を得るためには、このくらいの時間が必要だろうと思い直しました。

こちらが与える課題としては、単純な計算の反復ではなく、最初からパズルに近いものを用意するようにしています。ここで紹介するその一例は、足し算・引き算を使用して行う「かずづくり」です。この前に行った「油分け算」の課題では、中身を容器に移し替えるという過程で知らず知らず足し算や引き算を行っていたわけですが、それを今度は抽象化し、直接的に数字と取り組み合ってもらおうというわけです。問題ではまず、使用する数字が例えば1、4、6、8と提示されます。これらの数字を足したり引いたりしながら、

例えば答えが 19 や 17、3 などの指定された数字になるような計算式を作るのです。これもまずは単純な試行錯誤から始めていかなければなりません。ほとんどの子供達が、とりあえず足したり引いたりと試していきます。そしてたまたま解答にたどり着くこともあります。子供達も慣れてくると自分自身の効率的なやり方を見つけようと頭をひねり始めます。一人の子は、与えられた数字を前もって計算しておき、別の数字として保存するというやり方を試していました。もちろんこのやり方が解決のために最適であるというわけではなかったのですが、発想としてはとても見所のあるやり方で、子供達が単なる計算を行っているだけでなく、計算の仕組みやロジックそのものについて頭を働かせているということがよくわかります。例えばマイナスの概念や括弧つきの計算などを子供達が知っていれば、きつともっと簡単に解けたことでしょう。しかし、それを教えられる以前にも、かなり近いところまで子供達は自分の力で歩みを進めていくことができるのです。子供達のそのような地力を垣間見ることができたのは私にとってもとても楽しいものでした。

さて今回また改めて感じことは、このような歩みはご家庭の協力があるといっそう力強く進んでいくということです。家で保護者の方と一緒に問題に取り組んだことについて楽しそうに話をしてくれる子供達がいまいましたが、確かにその経験は子供達に良いフィードバックを与えているようです。山の学校は“楽しく勉強”することを教えるところですが、“楽しく勉強”すること自体は山の学校の中の出来事だけに限らないということも子供達は知る必要があるでしょう。是非、ご家庭で、保護者の方も“楽しみながら”子供達の課題に協力してくださることをお願いしたいと思います。

(文責 上尾真道)

『かず』 4年生(水曜2限) 担当 福西亮馬

このクラスは S ちゃんとのマンツーマンです。秋学期は、かけ算を使う問題とパズルに取り組みました。

かけ算では、最初のころはおはじきを用意して『石取り』をしました。ルールは、場のおはじきを二人で交互に 3 個まで(最低でも 1 個)取っていき、最後の 1 個を取った人が負け、というものです。何回戦かするうちに、S ちゃんは、自分が負けの時はいつも「場のおはじきが 5 個」になって自分の手番が回ってくることに気がきました。ということは逆に、自分が場を 5 個にして相手に手番を渡せば「勝てる」というわけです。

それでは、5 個にするためには、一つ前の自分の手番では場を何個にすればよいのでしょうか。

6 個では、相手に 1 個取られると、場を 5 個にされて負けてしまいます。

7 個では、相手に 2 個取られると、同様に負け。

8 個では、相手に 3 個取られると、同様に負け。では、9 個では？

「9 個だったら、相手が 3 個取っても 6 個。だから 5 個にできる」と、S ちゃんが言いました。では前の手番は？ すると、S ちゃんは「1、5、9 と続いているから、13？」という予想を立てました。実際、16 個でしてみると、「先攻」を選んで 3 個取れば必ず勝てることが分かりました。また 17 個の場合は「後攻」を選べば相手がどんな取り方をしても 13 個にできるので、勝てるというわけです。

ここまで分かったところで、今度はあるだけのおはじきを使って、68 個で考えてみました。ここで S ちゃんは案の定かけ算を用いました。1、5、9、13…なので、 4×10 を足して 53 という具合です。最終的に S ちゃんの作った 68 個までの必勝表は、次の通りです。

「石取りゲームの必勝法」(3 個まで取る場合)

65 → 61 → 57 → 53 → 49 → 45 → 41 → 37 → 33 → 29 → 25 → 21 → 17 → 13 → 9 → 5 → 1

自分の手番で上の表の個数になるように石を残していけば、相手に最後の 1 個を取らせることができる(つまり勝ち)、というわけです。表の作成だけなら $1+4+4+\dots$ と足し算をすれば十分ですが、石取りゲームで、「なぜ勝てるか」という問題の本質は、「4 の倍数+1」という見方にあります。ここで、S ちゃんに感心するのは、決して「解けたから良い」と思わずに、「何が大事か」も併せて考えてくれることです。こうした姿勢で学ぶことは、いつでも応用が利くようにと視野を広げる練習であり、後になってから大変有用な力となります。

一方、パズルにおける S ちゃんの取り組みも特筆すべきものがあります。ここでは一番手ごたえのあった問題だけを紹介したいと思います。

【問題】あなたはアラビアの盗賊団につかまり、生か死の選択を迫られている。盗賊の長が言うには、次のゲームに勝てば命を助けてやるという。さて、100%助かる方法はあるのだろうか？

「ここにA、B、Cの3つの箱があり、それぞれに赤白の玉が2つずつ入っている。そのパターンは赤赤、白白、赤白が1回ずつである。もともと箱の外側には中身を示すラベルが貼ってあったが、しかし誰かのいたずらで、「すべて」その中身と一致しないように貼りかえられてしまっている。お前は1度だけ、中を見ずに、箱から1つ玉を取り出すことができる（その玉はすぐに戻せ）。そして本番の玉を取れ。もし白が出れば命を助けてやろう。けれども赤ならば命はない」

【箱A】 ラベル：赤赤

【箱B】 ラベル：白白

【箱C】 ラベル：赤白

これは『論理パズル』と呼ばれる種類で、Sちゃんは今までこの手の問題を解いたことがまだありませんでした。しかしこの未知の難問に対して、Sちゃんは具体的に2色のおはじきを使って考えながら、以下の順序立てて解答してくれたのです。

- 1) Aの中身は赤赤ではない。Bは白白ではない。Cは赤白ではない。つまりラベルは「これではない」という意味になっている。
- 2) Aから1つ玉を取った時、その玉がもし赤であれば、Aの中身は赤白に決定。けれども、もし白であれば、白白と赤白の可能性がある。赤を取ると死んでしまうから、どのみち運任せになる。
- 3) Bから1つ玉を取った時も同様に、運任せになる。
- 4) ということは、もし100%助かる方法があるとすれば、玉を取ってよい箱はCしかないことになる。そこでCから1つ玉を取ってみる。
- 5) その玉がもし赤であれば、Cの中身は赤赤に決定。そしてもし白であれば、白白に決定。
- 6) Cが赤赤の場合
「Bは赤白になる」→「そしてAは白白」→よって「Aから取れば100%助かる」
- 7) Cが白白の場合
「Aは赤白」→「Bは赤赤」→よって「Cから取れば100%助かる」(お見事です！)

また最近では、これまでの色々なパズルを取り混ぜた『扉の書』というものをしてしています。Iをして喜んでくれたのに気をよくして、さっそくII～Vまで用意しました。それを開けるのを、むしろ私の方が楽しみにしているくらいです。



(文責 福西亮馬)

『かず』 5年生(木曜2限) 担当 福西亮馬

今学期は、パズルとドリルの二本立てで取り組んでいます。

パズルでは、春学期に「もっとしたい！」というリクエストのあったものを用意しています。ある生徒は、『トランプの迷路』というものが気に入って、お家でもお母さんにオリジナル問題を作ってもらっていました。迷路という他愛のないことでも、真剣に膝を落としてつきあってくれたお母さんとの思い出は、その生徒にとってかけがえのないものです。この間ついにその問題でノートが1冊埋まりました。これは賞賛すべきことです。きっとそのノートの存在は、これからも励みとなるでしょう。

一方ドリルは、市販のドリルをそのままではなく、見直しやすくするために、単元ごとに10～15ページ程度に分割して使っています。内容も、専ら2～4年生の復習です。それに対する意識を、「イチロー選手がもし『おれはプロだから、もう素振りなんかしなくてもいい』と言ったらおかしいか、それともおかしくないか？」とたずねたところ、言下に「おかしい！」「なぜ？」「だって、簡単なことほど一番よく使うから」と返ってきました。

その復習ドリルのことを、このクラスでは『巻物』と呼んでいます。そして『修める』(以前は『粘る』でした)という合言葉の下に、答が合うまで見直しすることに力を注いでいます。

見直しは勉強の基本です。誰しも「絶対大丈夫」だと無条件に自分を信じたいものですが、自分にできる精一杯の努力がないうちは、過信にすぎません。「もしかしたら…」ともう一人の自分を追い詰めることができるかどうか、その一回一回が、勉強を真剣に取り組んでいるかどうかの分岐点です。

ある時、生徒の方から「家で見直してきてもいいですか？」と聞いてきて、打てば響くと感心したことがあります。次の週、徹底的に見直して、満を持して提出してくれました。それでも採点すると、惜しいかな2問だけまだミスが見つかりました。本人は実に悔しそうに、すぐにその間違いを直していました。その悔しさが大事なのです。以前の自分から変わろうとする、勉強の「すべて」が、そこには詰まっています。

一方、見直しなしに「できた！」と言ってしまう癖は、空元気と呼べるものです。それは裏を返せば、すぐに「できない！」とあきらめてしまうことと同じです。なぜなら、どちらも汗をかいていないからです。算数で汗をかくとは、鉛筆を持つ手を動かすことです。それは泥臭いことには違いありません。しかし「解ける」「解けない」の分かれ目が、この泥臭いことに対してどれだけ前向きに「愚直であるか」ということなのです。

もちろん、答のない問題に対してまでも愚直なだけで良いと言っているわけではありません（またパズルがその補いとなるものです）が、最初にしなければならぬ基本には違いありません。このクラスでも、大きく「愚直」とホワイトボードに書いたことがありました。そして、「できない！」と簡単に言う時には、同じことを繰り返しました。「誰でもできることから——図をかいたり計算したり——鉛筆を動かすという所からしなかったら、できるはずがない。逆にそれさえすれば、君だったら必ずできる」と。そのように愚直にやればできる環境で守られているのが小学校の間です。

また、5年生は焦る時期でもあります。だからこそ、目の前のことを追いかける付け焼刃な勉強方法だけは、何が何でもこの時期には避けて下さい。それは結局の所は答を写すことになってしまいます。むしろ「見直し」と「復習」が低学年のうちにはなかった次の段階なのだというぐらいに思って、それに徹することが最も安全でかつ近道です。それには短く簡単なドリルを使うのがコツです。そして見直しを徹底する限り、それこそが最も厳しい方法です。

(文責 福西亮馬)

『かず』 5・6年生(金曜2限) 担当 高木^{あきら}彬

このクラスでは、前半30分にドリル、後半30分に、パズルと工作に取り組んでいます。

前半では、それぞれ前学年以下のドリルで復習を行ってもらっています。「早く今の学年のドリルに進みたい」と言う生徒もいて、それはそれで向上心の表れなのだと思います。しかし前学年の問題であっても、意外と抜け落ちがあるもので、そうであれば、まずはそこを埋めておく必要があります。たとえば、割る数が二ケタの割り算や、少しひねった幾何学問題、大数や概数の計算が、つまりことなく自由自在にできるようになれば、それは彼らにとって大きな自信につながると思います。また、もうすでに馴染んでいる問題でも、だからこそもう一度解いて、正解の経験を積み重ねることが、現在の難問に立ち向かう勇気を与えてくれるでしょう。

とはいえ、秋学期も半ばを過ぎました。ドリルに取り組む時間は、個人的で単調に思える時間ですが、それぞれのペースで精一杯頑張ってくれている姿が、いつも清々しく、それはお互いに良い刺激を与えあっているのだと思います。この調子でいけば、この文章がみなさんの目に触れる頃には、現在の学年のドリルに進む生徒も出てきていることと思います。

クラスの後半では、パズルと工作に、隔週交替で取り組んでもらっています。

パズルで取り上げているのは主に、迷路、間違い探し、マッチ棒パズルの三種類です。パズルの取り組みは、ドリルとは違って、同じ問題にみんな一斉に取り組むことになりやすいため、当然、解き終わる時間は生徒によってまちまちです。理想は、問題を解き終えた達成感を、それぞれの中で感じて、次に繋げてくれることですが、それでも、隣の子よりも早く解けたか、そうでないかは、気になるものだろうと思います。もちろん、「自分の方が早い」とあからさまに主張するような生徒はこのクラスにはいません。しかし、ひとり粘って問題に取り組んでくれている子に、焦りや自棄(やけ)が見えることもあります。そういうときにはいつも、私は、「早く解けることは素晴らしい。それと同じように、じっくり解くことも、一つの問題にそれだけ粘って取り組めたということだから、素晴らしい」と伝えるようにしています。

これは工作の時間も同じです。工作では、ペーパークラフトの要領で、しかし自分で方眼紙に展開図を描いてもらい、それを組立てています。ここで、図形や長さ、角度など、幾何学的な感覚を楽しみながら体得します。この工作の時間でも、たとえばある生徒は、正二十面体を、数週間に渡って完成させてくれました。周りがどうあろうと、自分の課題に正面から向き合い、地道に取り組んでいく姿は、本当に素晴らしかったです。正二十面体が完成したときの会心の笑顔は、生徒本人のみならず、きっとこのクラスのみんなの心のなかに、残っていくことだろうと思います。

(文責 高木 彬)

秋学期は、6年生にとって最もホットな話題の一つ、「分数」をテーマに取り組んでいます。まず、最初の授業で書いてもらった「分数と小数」の作文をご紹介します（ただし文中の図は省略）。

<T君> (分数について)

小数は、1、2など「何、何何何」というものです。分数は、たとえば $2/3$ だとすると下のやつは分母といいます。上のほうは、分子といいます。

たし算のしかたは「 $2/3+1/3=$ 」だとすると、下のほう分母のほうは足し算をせず3分の〜で、上のほう分母ほうはたし算をし3になる、そうすると $3/3$ になります。たとえば図であらわすと（ケーキの図）。

ケーキを半分にすると $1/2$ 、しかしケーキを切らなかつたら、1のまんまです。つまり $2/2$ です。すると $(3/3)$ だと $2/2$ も $3/3$ もいっしょです。なので $3/3$ も1です。

たとえば、「 $1+2/3$ 」だと、3分の2で分母はたさなから、分子のほうをたせばいいんだと思っている人は×です。なぜかという、 $3/3$ で1はつまり「 $1=3/3$ 」なのです。ならどうするかという、1は $2/3$ の横に書きます。「 $1 \quad 2/3$ 」。このことを1と $2/3$ といいます。

これからはすこし難しくなります。たとえば $5/4$ だと分母より分子のほうが大きくなっています。こういうときは、5の中に4は1つは入ります。これは「 $5-4$ 」をしたと思えばいいです。つまり $5-4=1$ だと「 $1 \quad 1/4$ 」となるのです。

かけ算になるとたとえば「 $1/2 \times 2/3 \times 3/4 =$ 」だと「 $1/2 \times 2/3 \times 3/4 =$ 」。この消すことを相殺するといいます。

(付図： $1 \div 1/2 = 2$ の意味について)

<U君> (小数について)

小数は、小数点という1より小さい位を表すためのものです。1より大きい数と1より小さな数を分けます。たとえば、0.1は（目盛りの図）で、1.5は（目盛りの図）です。0.111111（どれも同じ1ではありません）の最初の1は小数の一番最初なので、小数第一位とよばれます。二番目は小数第二位…と永遠に続きます。0.222…の「…」は無限に続くという意味のもので、これを無限小数と言います。では、

0.2222222

0.22…

上か下どちらが大きいです。実は下の方が大きいのです。上は小数第7位なのに下は小数第〇…といくらでもいけます。

計算はふつうとほとんど変わりません。しかしかけ算とわり算は小数点の位置がちがいます。例えば、 0.05×2.52 （筆算の図）= 0.126 と、かける方とかけられる方の小数点の位置をたして答えになります。

0.1の点数券が15枚と1.9点とどちらが多いでしょうか。15枚の方が多そうですが、枚と点なので、どちらかにしないといけません。15枚は0.1が15枚（なので $0.1 \times 15 = 1.5$ ）になります。これにより1.5点と1.9点では1.9点の方が多いです。

ここで書いたのは、小数のことのほんの一部です。だから小数のことをよく知って未知の所を発見してはいかがでしょうか。

春学期の『論理パズル』でもそうでしたが、授業のたびに思うことは、二人とも「自分なりの考え」というものを持ち、それを説明する自信にまで至っていることです。6年間の成長を思うと頼もしい限りです。

また節目では、地道な練習問題も課してきました。一番最近では、分数の計算で『通分』が得意になるために、「最小公倍数を見つける特訓」をしましたが、ここぞとばかりに粘り強く、力を発揮してくれました。二人とも質実伴いつつあって嬉しいです。

次に『確率』を取り上げました。これも「ある出来事の起きた回数／全体の回数」という分数で表されます。そこで、『ランダムウォーク』という現象で、ひたすらサイコロを振ってデータを取り、理論値である『パスカルの三角形』と比較考察しました（紙面が迫ってきたので詳しく述べられないのが残念ですが）。この『パスカルの三角形』もまた、自分たちの手でひたすら足し算をして作成してくれました。そのとき、T君とU君がつぶやいた一言が印象に残っています。「数の世界ってどこまでも続くんやな…」「本当。この『無限』って……どういうことなんやろう！」と。大きな数が規則に従って途方もなく続いていくことを知って、驚きがあったのでしょうか。この後も「フィボナッチ数列」「黄金比」と、分数の目で見える世界をとことん探索していくつもりです。ぜひ今の「知りたい!」「なぜ?」という気持ちを忘れずに、一緒に数の世界を冒険しましょう。そして中学でも雄飛して下さい。

『パスカルの三角形』

			1			
		1	1			
		1	2	1		
		1	3	3	1	
		1	4	6	4	1
	1	5	10	10	5	1
1	6	15	20	15	6	1

以降10段目に252、20段目に184756、30段目に155117520（1億以上）という大きな数が現れます。

(文責 福西亮馬)

秋学期、このクラスで取り組んだことの一つに、学校のテストの見直しというのがあります。今回はそれについて、少し話そうと思います。

まずもって、学校テストの意義とは何でしょうか。一つは、日ごろの勉強の成果を確認するということでしょう。つまり、テストの点数は、その時点での自分の理解度を具体化したものとなります。一部の人にとって、テストの意義はそこまでで、返ってきたテストは、点数を確認するものと考えているかもしれません。しかし、テストにはもう一つの、より重要な意義があると、私は思っています。その意義とは、自らの弱点の発見と克服です。持論ですが、採点された答案で一番重要なのは、丸ではなく、寧ろバツがついている箇所なのです。そこが自分の弱点であり、今後の勉強の方向性を与えてくれるものなのですから。

このクラスでは、それを踏まえたテストの見直しを徹底的に行っています。まず、そこをどうして間違えたのか、生徒さんに考えてもらいます。単なるケアレスミスであれば、どういうところでミスしやすいのか(例えば三単現の-sを付け忘れやすいなど)を確認し、テスト中にそうした箇所を重点的に見直すなどするという策を講じればよいわけです。またその間違いが、自分の分からない部分に関するものであれば、チャンスです。というのも、その部分こそ、自分の理解が不十分な部分だと、明確に示してくれるからです。例えば、「何人いますか」という疑問文を英訳する問題で”what”を使っていれば、その際に”How many ~?”を用いるということが、テストの時点ではわかっていなかったということが示されます。だとすれば、今後同じ間違いを繰り返さないようにするために、”How many ~?”という表現の仕方を覚え、どういう場面で、どのように用いるのかを勉強することが今後の課題として重要になるわけです。このように、テストは見直すことによって、自分の弱点や苦手分野がはっきりとし、その克服に向けた今後の勉強の方向性が示されるのです。

本来、それは自分で行う作業です。では、なぜ山の学校で、私と一緒にこうした取り組みを行っているのでしょうか。その理由の一つは、テストの見直しの意義を、早いうちに自覚して欲しいからです。私自身それを意識してやりはじめたのは高校生からで、中学生の時期にそうしたことを自覚していればと思ったことがあります。また、もう一つの理由として、効率的であるという点です。自主学习では、どうしてもわからない、納得できない点が出てきます。特に中学一年生という時期は英語に触れて間もないので、余計にそうでしょう。その時、近くでその疑問に的確に答えることができれば、それは自主的な学習の最良の補助になると思います。学校ではそうした時間がとりにくく、とれても人が多いため、必ず答えてくれるとは限りません。この山の学校が、そうした自主的な勉強の最良の手助けが行われる場になればと、私は考えています。

(文責 岸本廣大)

このクラス(中学の英語クラスでもですが)では、春学期から引き続き行っていることがあります。私は、それを単語の確認と呼んでいますが、クラスのはじめに、前の週に出題すると予告した10ほどの単語について、つづりや意味を解いてもらうものです。去年の私が担当する英語のクラスでも行っていたことで、何で今更この話をするのか、疑問に思われるかもしれません。実は、その取り組みが秋学期でちょっとした変化をしたのです。今回はこのことについて書いてみようと思います。

春学期から行われてきた単語の確認は、単に単語や訳語を並べて、その辞書的な意味やつづりを書かせていました。なので、英単語の名詞や動詞は単数形や原形のままでしたのです。生徒さんは、良く復習しており、毎回ほとんどミス無くこなしてくれました。ただ、実際の問題演習では、それが上手く生かせない時もあります。例えば、空欄補充に単語を入れる際、単語の変化を忘れる、などです。しかし、空欄のある文が過去の文であれば、過去形を用い、受動態の文なら be 動詞+過去分詞を用いなければなりません。別に、ここで生徒さんのミスをあげつらって、責めているわけではありません。むしろ、このことで、次なる課題が発見できたとポジティブに、私は考えたのです。

そうした苦手克服のため、秋学期からは、ただ辞書的に意味やつづりを書く形式ではなく、英文と訳文の一部を空欄にし、適した単語や訳を適した形で入れる形式の問題にしたのです。そうすることで、ただ記憶から単語をアウトプットするのではなく、文全体を見渡し、文法を理解した上で、単語を記入していくこ

とが必要となるのです。解いている様子を見ていると、最初は原形のまま単語を記入した後、文に適した形に書き直す様子が見られました。単なる記憶の出し入れの作業ではなく、文全体を捉えて考えるようになっていのでしょうか。また熟語などの訳も、実際の英文のシチュエーションで接することができるので、和訳の幅が広がることも期待できます。このように、問題は少し難しくなりましたが、その手応えが以前よりも少しレベルアップしたという実感を持たせてくれるのではないのでしょうか。

さらに、こうしたレベルアップは、問題を作成する私のレベルも、少しではありますが、上げてくれます。毎回決まった単語を使って、七つほどの英文を考えるのですが、その中に、高校生が苦手そうな文法事項を盛り込んでいます。また文からの推測が可能のように、できるだけストーリー性のある英文を作っています。私の能力不足のため、いつも問題作成には時間をかけるのですが、これもまた、私自身の力になっていると実感しています。まさに、生徒さんと私自身が、共にレベルアップしたかのような思いを、私が勝手に抱いているわけです。互いに更なるレベルアップができるよう、今後も単語の確認に取り組んでいきたいと思っています。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 高2年生 (水曜3限) 担当 上尾真道^{まさみち}

英語学習の本懐は、英語を——会話、読書、作文などで——使えるようになることを目指すという点にあると言えます。さて前回の『やまびこ通信』で書いたことでもありますが、それは単に授業や試験のためということではありません。やはり最終的には日常生活に英語が生きた形で関わることを目指すことが必要だと思えます。そしてこれは何も国際舞台で活躍することを目指すとか、そういう特別なことを目指すというわけではありません。今日一日だけでも耳に注意してみてください。テレビニュースのインタビューや、ちょっと立ち寄ったコンビニのBGMなど、英語は既に十分に生活の範囲に入ってきているはずですよ。結局、英語を学習する意義は、例えば字幕を気にせずに映画を見たり、翻訳が出る前の人気小説の最新刊を読んだり、ラジオから流れる歌の言葉に感動したり、そうした生活の中のごく平凡な——しかし豊かなものでもある——営みに主に関わってくるのではないのでしょうか。

このように言うのも実際、何より英語学習の基礎が、作業としては退屈な記憶と習慣づけにより成り立っているからです。そしてそれを続けるコツは、どれだけ英語に対する関心を日常的に持続できるかということに他なりません。さて、英語はいまや事実上押しも押されぬ世界言語となっており、真面目な議論から映画のような娯楽に至るまで、あらゆる地域から発信された情報が英語によってアクセス可能です。若いうちからわけても英語を学ぶのは、こうした世界を身近にし、そのうちでより豊かな生き方を築いていくために他なりません。逆に言えば、こうした世界への興味からしか、英語を“覚える”本来の動機付けは生まれてこないだろうと私は考えています。

ところで、こうしたことを踏まえたうえでどのような授業を展開するかという点については、実は私自身まだまだ試行錯誤の段階です。個人的には、目前の試験の出来に気を取られるよりも、2年後、3年後にでも英語を自分のものにするための土台を作ることが大事だとも思いますが、結局英語学習の大部分が学校教育の中で組織されているという現状がある以上、上手く歩調を合わせた作戦をとっていきしかありません。そこで秋学期の授業では学校の授業内容をフォローする形で行うことにしました。ただしその際も重要なのは、ただの文法事項の暗記ではなく、それが表現の手段であるということを出しながら身につけていくことです。まどろっこしく見えるかもしれませんが、まずはシンプルな単文の作成の練習や形容詞や副詞の使い方の復習などを経て、比較の表現に入っていくのです。英語の構造に含まれる論理や発想に地道に馴れていくことが必要です。常に基礎の復習に根ざしながら新しいことも取り入れていくという進め方は時間のかかるものでもありますが、大事な部分を手放さないようにして今後もよりよい授業を模索したいと思います。

(文責 上尾真道)

日本語の読み書き

中学生・高校生
生徒募集中！

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行います。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

『英語の基本』 高1・3年生（水曜3限）担当 浅野直樹

今年度から生徒の進学につれて中学英語から高校英語という枠組みになり、内容も高度になってきました。このクラスの二人は、語彙に多少制限が設けられているとはいえ、中身も分量も立派な英文を読めるようになってきています。一見難しい英文でも中学校で学習するような基本ができていればかなりの程度を読むことができます。このクラスで実際に質問を受けた例をいくつか紹介します。

例1：He was fired because of the disease.

文全体が短くて複雑な構文も使われておらず、かつ単語も易しいですが、意味を取るのなかなか難しいです。"fired"がポイントとなるわけですが、これは"~ed"という形からしても、文中での位置からしても動詞（過去分詞）であることは間違いありません。そう思って"fire"を辞書で引くと、動詞のところに「火をつける」、「発砲する」、「解雇する」などと出てきます。ここでは文脈から「解雇する」ですね。

例2：We clean the sword with lemon.

文型を考えると、We が主語(S)、clean が動詞(V)、the sword が目的語(O)となります。そうすると意味は「私たちはレモンで（レモンを使って）剣をきれいにする。」であることがわかります。「私たちは剣でレモンを切る。」では決してありません。

例3：The children feel under the weather in the morning.

先ほどと同じように文型を考えると、The children が主語(S)、feel が動詞(V)、under the weather が補語(C)であろうと推測できます。"under the weather"がよくわかりませんが、前後の文脈をよく読むと、「子どもたちは朝に気分がすぐれない。」といった意味に違いないと思い、辞書で確認するとその通りでした。

この最後の例では文脈の力を借りました。文脈を読むと言っても難しく考える必要はありません。その英文で筆者が一番伝えたいことをまずつかみ、あとは but や for example などの接続語に注目して話の流れを追うことです。but の後には必ずその前の内容とは反対の内容が書いてありますし、for example の後の具体例を理解すればその前の一般論を理解する助けになります。多少意味を取りづらいつら箇所があっても、こうした手がかりを使えば大部分は解決できます。

5 文型の考え方などを活用して英文の構造を把握し、前後の文脈を正確に押さえれば、あとは辞書と少しの想像力でどのような英文も読むことができます。こうした読み方さえできるようになれば、自分一人でも学習を進めていくことができます。

(文責 浅野直樹)

『数の基本』 高2年生（水曜4限）担当 浅野直樹

前号の『山びこ通信』では「数学的な本質の理解と、計算や公式の運用練習はバランスが大切」と書き、後者に焦点を当てましたが、今回は前者に着目します。

みなさまは図形と方程式の範囲で点と直線の距離を求める公式を覚えていらっしゃいますでしょうか。

$$d = \frac{|ax_1 + by_1 + c|}{\sqrt{a^2 + b^2}}$$

という複雑なものです。この公式を見て、なぜこの式になるのだろうかと考えるか、丸暗記しようとするかが数学を楽しめるかどうかの一つの分かれ目になると思います。

このクラスでは K さんからこの公式がわからないという質問を受けたのでうれしく感じました。教科書では一応の証明はなされているものの丁寧ではなく、覚えるべきだという扱いだったにもかかわらずです。順を追って考えれば決して難しくはないので、この場でいっしょに考えたいです。

まずは足がかりとして原点 $O(0, 0)$ と直線 $ax+by+c=0$ (図 1 の①) との距離 d を求めてみます。原点と直線の距離は、原点からその直線に垂直な直線を引き、その交点と原点との間の長さのことです (図 1 の OH)。①に垂直な②の直線の式を求めます。①を変形すると $y=-\frac{a}{b}x-\frac{c}{b}$ となり、②は①に垂直なので、その傾きは $\frac{b}{a}$ となります。二直線が垂直 \Leftrightarrow 傾きをかけると -1 です (その証明は省略します)。②は原点を通るのでその直線の式は $y=\frac{b}{a}x$ となります。次に①と②の交点 H の座標を求めます。2つのグラフの交点の座標は2つのグラフを表す式の連立方程式を解けば求めることができるのでそれを解くと $H(-\frac{ac}{a^2+b^2}, -\frac{bc}{a^2+b^2})$ となります。ここまで来ればあと少しです。 $d=OH$ は点 H から x 軸あるいは y 軸へと垂線を下ろして直角三角形を作って三平方の定理を用いればよいので、 $\sqrt{(-\frac{ac}{a^2+b^2})^2+(-\frac{bc}{a^2+b^2})^2} = \frac{|c|}{\sqrt{a^2+b^2}}$ となります。以上より原点と直線 $ax+by+c=0$ の距離は、 $d=\frac{|c|}{\sqrt{a^2+b^2}}$ となります。

最後にこの公式を原点以外の点と直線の距離を求める公式へと一般化しましょう。点 (x_1, y_1) と直線 $ax+by+c=0$ (図 2 の ℓ) の距離を求めます。求めたい距離 AH は OH' に等しくなります。つまり、直線 ℓ のグラフを x 軸方向に $-x_1$ 、 y 軸方向に $-y_1$ だけ平行移動した直線 (図 2 の ℓ') と原点との距離を求めればよいわけです。一般にあるグラフを x 軸方向に a 、 y 軸方向に b だけ平行移動するときは、もともとのグラフを表す式の x のところに $(x-a)$ 、 y のところに $(y-b)$ を代入すればよいので、今回の場合、 ℓ' を表す式は $a(x-(-x_1))+b(y-(-y_1))+c=0 \Leftrightarrow ax+by+(ax_1+by_1+c)=0$ となります。原点と直線の距離を求める公式は導出済みなのでそれを用いて c のところを ax_1+by_1+c とすればよいので求める距離 $d=\frac{|ax_1+by_1+c|}{\sqrt{a^2+b^2}}$ となります。

上記の過程を考えるのは楽しく、数学の底力をつけるためにもよい練習になりますが、実際に点と直線の距離を求めるときにいちいちこれだけ考えていると大変です。よってこの公式を運用する練習もすべきです。蛇足ですがこのクラスの C さんが言うようにベクトルは図形を代数的に処理するのに優れているので、ベクトルの考え方で同じ公式を導くこともできます。それも楽しめます。

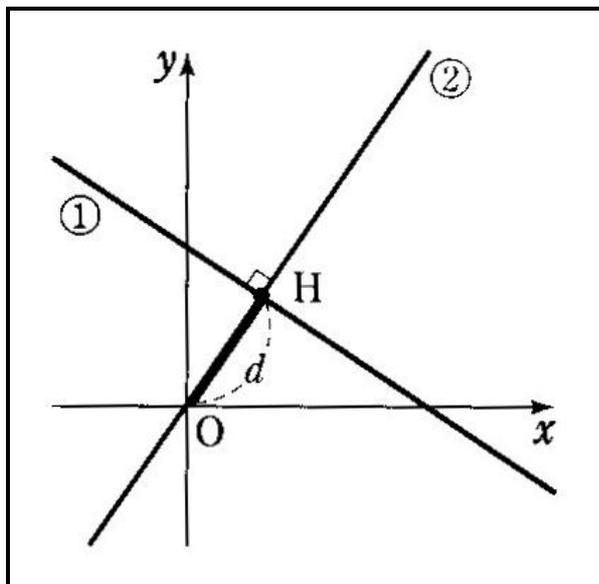


図 1

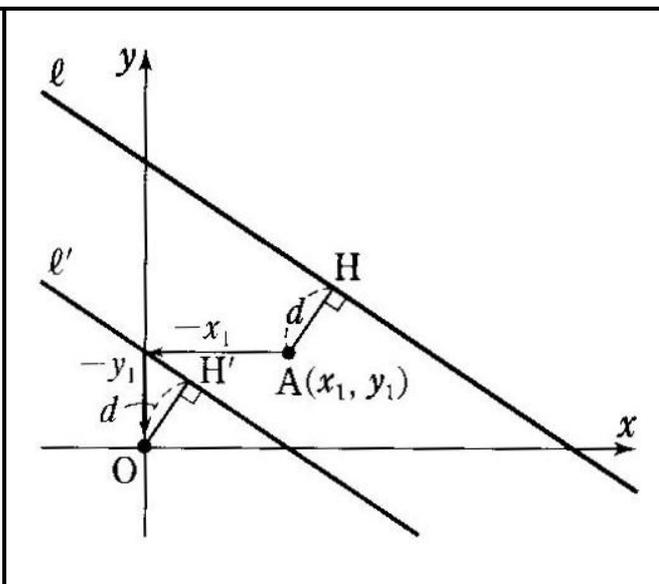


図 2

(文責 浅野直樹)

今期も引き続き、『徒然草』を読み進めています。今学期は受講生がお二人となり、それぞれの関心に合ったコメント、意見を頂戴できることで参加者皆への大きな刺激になっています。『徒然草』を読むことで、現代に生きる私たちが時に叱咤を、時に激励を受けているような思いにもさせられます。これは講師である私の関心ですが、文章の向こうに透けて見える当時の社会の様子や人々の意識などを探求することで、文章への理解もより深まるように感じています。

現在 180 段辺りまで進んでおり、あと 1~2 学期で最後まで読めると考えています。途中からのご参加も歓迎いたします。兼好法師とともに、古文の世界を旅してみませんか。

「古文講読」を受講して

石田良一

昨年四月から「古文講読」を受講して「徒然草」を丁寧に読んでもらってゐます。先生一人に生徒一人といふことで、贅沢といふか申し訳ないやうなのですが、おかげで私の意見も自由に述べることが出来て有難いです。

何となく分つたやうな、さういふ分り方はいやなので、一語一語出来るだけ辞書を参照して「厳密に」理解するやう努めてをります。特に、昔の用語では「辞」、今の学校文法では助動詞・助詞・感動詞などですが、この「辞」の働きを正確に把みたい、これが日本語のポイントだと思つて努力してゐます。

又古文を勉強してゐると、それと比較して現代の日本語についても色々反省させられることが分つてきて、中々有意義です。

実は、数年前から、古典ギリシア語の初歩を少し齧つて大分苦勞したのですが、しかしそれはたとへ分つても頭の中の理解にとどまつてゐますが、それに比べると日本語の場合は、文章の勢ひや書き手の心の動きなどが、何といふか全身でよく分る、といふ感じがあつて、時に感動することもあります。

私一人の生徒では勿体ないので、是非御参加をお勧めします。

「人不知而不愠、不亦君子乎」

山下太郎

山の学校には大人向けに古典クラスがあり、そこでは、ギリシア語、ラテン語を学ぶ機会があります。なぜギリシア語？なぜラテン語？と疑問に思う人がいるかもしれません。英会話やコンピュータの教室ならそんな質問はされずにすむのですが（笑）。「有用性」ならいくらでもあります。京都の寺社仏閣を訪れる外国人は多いのですが、漢字が読めると旅の楽しさは格段にアップするでしょう。欧米文化において、ギリシア語、ラテン語の果たす役割は、東洋文化における漢字の役割に等しいと言えます（ヨーロッパを訪れるとラテン語で書かれた碑文の多さに圧倒されます）。実際、英語の文法にせよ、語彙にせよ、ギリシア語、ラテン語の影響抜きには語れません（フランス語、イタリア語等もしかり）。

現代日本文化に目を向けても、たとえば車の名前に使われるラテン語は数多くあります。プリウス（Prius）は「第一の」（英語なら first）を意味するラテン語の形容詞です。これは世界「初の」ハイブリッドカーにふさわしいネーミングです。逆に、同じトヨタにブレビス（Brevis）という「高級車」がありました。トヨタの広報によると、Brave（勇敢な）という英語からの命名だとか。ラテン語を知っていると、Brevis は「短い」を意味する形容詞に見えてきます（Short の綴りは「短い」を連想させるのと同様）。この指摘に対し、「これは日本車だからこれでいいのだ」と言われたらそれまでですが、一方で日本の誇るゲーム産業は世界を視野に入れていきます。かつて FFVIII の主題歌のラテ

ン語訳を頼まれたとき、作曲家の植松伸夫氏に「なぜラテン語の歌詞なのですか？」とお尋ねしたことがあります。返ってきた答えは、「FF（ファイナルファンタジー）は世界を見ているからです」というものでした。私はゲームに疎いのですが、ファンなら「なるほど」と納得されるのではないのでしょうか。世界を見渡すと、ラテン語は学名や合唱曲の世界で大活躍であることは言うまでもなく、そのことに気づいた日本人が商品名や曲の歌詞にラテン語を用いるアイデアを思いつくのは自然なことだと思われま

す。おっと、一番大事なことを言わずにすますところでした。古典語を学ぶ理由として、ホメーロスやウェルギリウス、キケロー、セネカといった作家の作品を「原文で読めるから」という答えは王道中の王道です。「クラス便り」にあるとおり、山の学校では文法クラスの他、これらの作家の作品をじっくり丁寧に読んでいます（余談ですが、講師の間でも『アエネーイス』の読書会を毎週開いています）。予習をし、復習をし、遠方から集う同士の面々。まさに「有朋自遠方来 不亦楽」（朋遠方より来たる有り。亦た楽しからずや！）と言うべきでしょう。

今不用意に「王道」と言う言葉を使いましたが、よく考えると、古典語を学ぶ理由に本来王道も何もありません。私たちはめいめい、自分が得をするように学ばよいです。辞書のひき方がわかる程度でよい、というのも立派な学習の動機付けです。古典語は大きな釣りのようなもので、大きく叩けば大きな音を出し、小さく叩けば小さな音を奏でてくれます。中国の古典に「無用の用」という言葉がありますが、「用」については人間の数だけあると言えます（この「用」を外から画一的に与えようとするのが今の教育の問題点）。私たちはその「用」を知らずに学び初め、後でそれに気づくというわかり方が本来だと思われま

（文責 山下太郎）

『ラテン語初級講読』 A（火曜4限） 担当 山下大吾

「ラテン語って、本当に動詞にワタシの変化があるんですね」—このような感想を、ある日の授業後受講生の方がふと漏らされました。前学期途中まで読み進めた『国家について』の抜粋から、初めてキケローの書簡に取り組んだ授業後のことです。

今学期のラテン語初級講読 A では、『アッティクス宛書簡集』を中心に、キケローが主に友人達に宛てて記した書簡を読み進めています。書簡の長さはそれぞれ異なりますが、現在までに二通読み終えました。キケローの記したラテン語を文字通り一語一語、文法を確認しながら訳読しています。複数の注釈書を参照し、必要に応じて和訳と英訳の助けも借りながらの訳読です。書簡集用に編纂された語彙集をお渡しして、少しでも受講生の方の負担が軽くなるよう努力しています。

書簡というジャンルの特徴として、キケローの記した他の作品、弁論や哲学的著作と比べ、修辭的に凝った表現、美辭麗句の少ないことが挙げられるでしょう。ここで目にするようになるキケローは、いわば肩の力の抜けた、普段着のキケローです。一例として、哲学的著作の一つに数えられる『老年について』はアッティクスに献ずる形で書かれたものですが、その献辞では「あなたの克己心と平常心はかねてよりよく存じていますし、あなたがアテーナイから「アッティクス」という綽名のみならず、教養と思慮をも持ち帰ったことも、了解していますから」などと、いかにも献辞らしく改まった、名前の由来を基にした巧みな表現ではあるもののやはりやや硬い言い方が見られます。一方書簡ではその同じアッティクスに対して、「僕が思うに、君達ギリシア人はこう言っているね」と多分に茶目っ気のある、からかいの表現で単刀直入に呼びかけているのです。政争渦巻くローマを避け、アテーナイで優雅に暮らす親友に対する、ある種の羨望をも認めることができるでしょうか。また手紙が来ないことにお互い不満を漏らし、それに対して弁解する一方悪いのは寧ろ君の方だと責め返すところなど、今の世と変わらぬ姿を見出して思わず頬が緩みます。

冒頭の感想はそのような私人キケローの言葉を読まれた後伺ったものです。『国家について』では歴代のローマの王について述べられた箇所を読み進めたため、一人称の出番はありません。これまではチェーホフ『三人姉妹』のマーシャよろしく、機械的に活用形を繰り返す際最初に出てくるものとしてしか馴染まれていなかった、何とも不可思議な、暗誦する当の本人はどこかに置き去りにされてしまった血の通わぬ ego の活用形が、生きたキケローの言葉として、受講生の方の目の前に現れたのです。帰宅後書簡を読み直してみると、親友を失い悲嘆にくれつつも、その悲しみをアッティクスと共有し乗り越えようとするキケローの声が、二千年という時を超え、キケローその人の声として、改めて強く響いてくるように思えました。

『ラテン語初級講読』 B (水曜 4 限)

担当 前川 ^{ゆたか} 裕

水曜夜のこのクラスでは、文法を終えたばかりの方を対象とし、今期からキケローの『友情について』を読んでいます。この本は前書き部分がやや長いのでそこを飛ばし、本論の始まる 17 節から読み始めました。今期は 2 名のご参加をいただき、文法事項の復習を行いながら丁寧に進めています。一回は原文で 10 行弱程度ですが、着実に進んでいます。

初級の頃は、細部に拘りすぎず、ある程度量を読み進めることが大事だと考えています。日本語訳を参照しながら、「なぜこのような訳文になるのか？」ということを考えるのも、立派なラテン語の勉強だといえます。難しい点は先送りでもよいでしょう。それよりも、基本的な活用形をきっちり確認していくことで、将来のための基礎をしっかりと押さえていくことが重要です。

次期も引き続き、『友情について』を読み進めます。進度がゆっくりですので、初級文法を終えた程度の方であればどなたでもご参加いただけます。どうぞお問い合わせください。

『ラテン語初級講読』 C (金曜 4 限)

担当 前川 ^{ゆたか} 裕

金曜夜のこのクラスは、前期から引き続いてセネカ『ルキリウスへの手紙』(書簡集)を読んでいます。今期は第 20 書簡から読んでいますが、継続して参加されている 2 名の方はセネカにかなり慣れてこられました。1 回 20 行弱を読み進めています。書簡の良いところは比較的短い単位でまとまりがあることで、「一つ読み終えた」という充実感を得ることができます。これは継続のための大きな力となります。セネカは世の中の価値や流れに揺り動かされない心の平静を説いていますが、このような姿勢は現代の私たちにも訴えるものです。人間は、結局それだけ変わっていないということでしょうか。

次期も引き続き書簡集を読み進める予定です。ご関心のある方はぜひお問い合わせください。

古典語をくはじめて・あらためて> 学びたい方へ

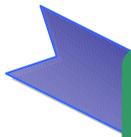
今回の「山びこ通信」には、古典語クラスの開講科目の一部をご紹介します。以下はその補足です。

はじめてラテン語を学びたいと思う方には、次の文法・入門クラスがあります。①岩波書店の「ラテン語初歩(改訂版)」を使うクラス、②同教科書をベースとしたオリジナル教科書を使うクラス(羅文和訳を精選。和文羅訳を省略)、③Lingua Latina (Hans H. Orberg) を使うクラス。①と②は一学期(12回)で教科書を最後まで終える速習クラスです。文法をさっと終え、次の学期からは講読に進みます(講読を通じ、文法の復習もします)。

③はいわゆる「文法」の専門用語を使わず、ラテン語をラテン語のまま習得しようという意欲的な入門クラスです(その目的でつくられた教科書を使っています)。この秋学期からスタートしましたが、いつまでに終わらなければならないという期限は設けていません。すでにラテン語をかじった経験のある方なら、途中参加は可能です。

次にギリシア語についてですが、文法クラスは一年かけて教科書(水谷智洋『古典ギリシア語初歩』)を学びます(今は四月スタートのクラスが継続中です)。次の開始時期は、平成 22 年の 4 月を予定します。講読クラスはホメロスの『イーリアス』。これは文法を学んだ方なら途中参加が可能です。内容理解に加え、叙事詩の朗読の仕方も含めてご指導いたします(ラテン語の中級講読——ウェルギリウスの『農耕詩』——も同様です)。

「山の学校」では随時新入会員を募集しています。「学びたい」という気持ちをお持ちの方はぜひお問い合わせ下さい。



イプセ ディークシト しのたまわく
 ● “Ipse dixit.” —子曰

文／山下太郎

Ipse dixit. を直訳すると「彼自身がそう言った」となります。キケローの『神々の本性について』に見られる言葉です。

この文の主語は、ピュタゴラス派の師、ピュタゴラス自身を指します。この学派の人間は議論の論拠を求められると、きまってこの言葉を口にしたとキケローは言います（厳密には作品の中の人物がそう言います）。

言葉を補えば、「だって先生がそう言われたんだから（正しいに決まっている）」というニュアンスになります。

これが格言として一人歩きすると、判断の基準を何らかの権威に置くような、根拠なき主張を揶揄する表現として用いられます。

これに対し、「自分はこう考える。自分はこう思う。」に相当するラテン語は cogito (コーギト) 一語で事足ります。

デカルトに Cogito ergo sum. (われ思うゆえにわれあり) という言葉がありますが、今の文脈に即して訳せば、「私は自分で考える。それゆえ私は生きている」となります。ラテン語の sum という動詞はこれ一語で「われあり」すなわち「自分は生きている」ということを意味します。

逆に、自分で考えることをお留守にして、Ipse dixit. と口にする人は、"ergo non sum." すなわち、「ゆえにわれなし」となるのではないか、つまり、判断の根拠を権威に求める癖がつくと、生の実感が希薄になる恐れがあります。

ちなみに、表題の訳「しのたまわく」とは、『論語』における「子曰」の読み下しとして知られます。「先生（孔子）が言われた」という意味です。

たとえば「彼は何かというと『論語』を（権威として）持ち出す。何でも『子曰』だ」という例文を考えてみると、この「何でも『子曰』だ」という言葉の否定的なニュアンスが、表題の Ipse dixit. に認められるということです。

『論語』を学び知識としてその内容を知っていても、実践に生かせない人は、「論語読みの論語知らず」と言われます。

ラテン語にも、「本を読んでもそれを理解しないことは、本を読まないのと同じようなものである」(Legere et non intellegere est tamquam non legere.) という言葉があります。

頭でわかっているだけでは本当に理解したことにならないという考えは、古今東西を通じて変わらない真理のようです。

(文責 山下太郎)

第17回 **ラテン語のゆうべ**

とき 11月16日(月)

午後6:30~8:00(参加無料)

講師 前川裕(山の学校ラテン語講師)
 場所 北白川幼稚園・第3園舎
 演題 『バルセロナのラテン(語)文化』
 対象 ラテン語に関心のある方

学校法人北白川学園 北白川幼稚園・山の学校 〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41
 電話 781-3215 FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通) 電子メール taro@kitashirakawa.jp
 ホームページ <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html>